

類題新英集井上喜文輯全

二







叙

まゝ解るる處にてもよりのはか
なまの心を述べたはるはこ
みちのまゝみちのまゝはる
おのゝまゝはるまゝはる
まゝはるまゝはるまゝはる
まゝはるまゝはるまゝはる



とて書きて居るに
新英集なるものあり
二編ありて
一編は
一編は
一編は
一編は
一編は

あつた
たつた
たつた
たつた

明治十九年

新英集

類題新英集

春部

新年 立かへる年のほき言に千代ふくみねの松風の聲 重徳

あら玉の年の始や入みなのおなこころに娛かがるらん 八東

限りなく道開け行大君のみよのさかりにかへるといかな 俊康

野山までうひくもみえにけりけふ改まる年の光に 利宣

いさ我も世に有かほに初日影いもふみ旗を軒にかこけん 正誠

日のみえた軒に靡かぬ里もなしゆたけきみ代の年の始に 秀次郎

都新年 日のみ旗高くかゝけて都人けふあら玉のどいむかへけり 伸穂

新年雪 改まる年のあしたお降雪を花とあしるかどのまつたけ 正倫

新年松 年たては松の梢を吹風も千代をいらふるこゝちあそすれ 敏

新玉のどい立かへるけふみれば松も緑のあたらしきかな 政治

新年祝

たらちねにさこけはーむる盃につきせぬ年を祝ふけさ哉
 思ふとちうたみに年をことほきてとる盃はあかすも有哉
 新玉の年立かへるけふ毎に神ときみとをいもふうれーき
 千代よもふたつかね高く聞ゆ也けふあらたまる年の始に
 めでたしと物あたらしくおほゆるは春立今朝の心也けり
 うすかそみたな引初て人心そころうきたつ春はきにけり
 吳竹のよえほのーと明そめて娛ーきふーの春は來に是
 けさの春樂しや老の年なみもまた若かへり立こちして
 岩やどの例のまめをひく軒にあおもしろ初日かけ哉
 初春のけさの心をこゝろにて一とせながら過してーかな
 さほ姫のかすみの衣立そめて空のとかなる春はきにけり
 天つ日の惠のまゐるし顯えられたのとききけさの春や立らん
 隆 足
 倉 子
 清 直
 方 升
 忍 古彦
 泰 靈
 吉 胤
 顯 允
 文 樹
 金 雲
 等
 澤 隆

新年見鶴

立春

あざりする海人も柴こる山人もかそむ日影に春や知らん
 年毎にくれとかはらぬ春なれば老てもたなし心ち社すれ
 立春山 春と先あつまちよりや立ぬらんふーの神山けさかすみ景
 けさみればかすみぬ山も改めて緑をたこむえるの山のえ
 立春川 氷おし冬の名なれや水無瀬川春たつけふを浪もふそたて
 雪 降積るあさけの雪に引かへて心とけゆくはるはきにけり
 春中 雪はまた消のこれとも春くれはみどりにかすみ峰の松原
 初春霞 あさみと里柳のまゆの三日月にかこるも薄き初かすみ哉
 立かへる春の姿をけさみればうすきかすみの衣きにけり
 初春鶯 野も山も雪けなからにのとけきはみ代の春まゐる鶯のみる
 早春山 さえくれー雪けの雲に立かへてけさは霞のころもかせ山
 いつのまに春やきぬらんあり明の山の月影かすみ初たり
 勇 雄
 敬 喜
 高 陽
 重 美
 泰 靈
 昭 則
 豐 健
 國 足
 信 安
 峰 子

早春川	水上にたれ洗ひけん初若菜一葉ゆるしくなかれきにけり	吉次
河邊早春	すみた川あしまの氷解をめていかたにかろき春の初かせ	道別
早春浦	浦のあまか汲手もすまに満ぬらん朝日さしそふ春の初潮	國足
風光	梅の花かをるまかきにけさは又初うくひすの聲の聞ゆる	一絲
日々新	よろつ代の初音をいそかめのをの山よ心もひく小松哉	權
子日	梓弓とるの野に出て若松を引てちとせをいそふけふかな	是主
若菜	娛さの袖にこほれてみゆる哉かたまに餘る鈴菜すこしろ	盛愛
	ねせり摘少女か袖もひちぬらんかたま持てにさゆる春風	元一
	朝日さす岡への若菜春と淺みひとつ二葉もめつら一き哉	幽叟
	待わひ一人の心もあつさ弓とる立ぬとやわかになつむらん	文祥
	春はまたあさ澤小野に白妙のゆきま尋ねて若菜つまこし	重一
	みや人の昔のてふり千代かけて若菜つむ也春日野のはら	譽濟

野若菜	をとめ子か緑の袖の其色にもゆる若菜をのへにつむかな	春萬侶
海邊若菜	春されはわかぬ浦人若かへり老をわすれてつむ若菜かな	秀次郎
名所若菜	山城の竹田のわかぬ摘くれてふしみの里に一夜ねにけり	重武
霞	花はなほさかぬ野山のけ一きにも霞そ春のまに繪也ける	季賢
	むさしの、木々のむさ立遠近にかすみ分たる明ほの、空	介福
霞知春	山里は花うくむおもおそければ霞そ春のまをりなりける	壽久
朝霞	朝けたく煙の末は久かたのそらにたな引かすみなりけり	扶祝
松上霞	またさかぬ藤江の浦の春かすみ松にか、まて先なひく哉	隼雄
山霞	佐保姫のかすみ衣はるかにも立へたてたるあその高山	湛隆
	秩父山かすみ色こくたなひくは炭やく煙たちやそふらん	政賢
霞遠山衣	あさみどり霞のころも重ねきてよそほひけり春の遠山	小龍春萬侶
山家霞	世をいとふ谷のとほそを娛しくも立隠したる春かすみ哉	健

河 霞

あつさ弓春去くれば玉川にかずみの網をひかぬ日もな

うた子

海邊 霞

いはほ打磯の荒浪うつもれてかすみの底に音のみそする

正 満

沖つ波立ともみえす月かけのかすむ衣のうらのゆふなき

一 周

鹽かまのなひく煙を其まことに立重ねぬるはるかすみかな

惟 清

海上 霞

行舟の遠くなるをの沖津波かすみはてたる春のゆふくれ

良 秋

名所 霞

吹たろすうしろの山の春風にかすみたよふすまの浦浪

吉 胤

鷺

うくひすの聲は流さしすみた川堤の花をーからみにーて

健

うくひすの宿もとこや梅かをる谷より奥に唄傳ひして

元 武

咲うめの花よりさきにうくひすの聲社春の匂ひなるらめ

將之進

打羽ふき花にこつたふ鷺のにはひいてたる聲そのとけき

眞 美

ふみまなふ南の窓に吳竹のふーおもーろさうくひすの聲

喜 睦

おこたりを諫かほふも朝あー我窓近くうくひすのなく

司 方

待

鷺

ねもほえす長おしてけり鷺の初音を松のこかくれにーて

直 雅

曉

鷺

春雨たよのまにをれてあかつきの空のどかなる鷺のこゑ

義 成

あかつきの夢路の末に覺てきくをつ鷺のあかすもある哉

豊 壽

寐覺 鷺

ゆめさめー枕の山によそなからそやくもきなく鷺のよゑ

延 子

朝 鷺

花をまたさかぬ梢にうくひすの聲のみ匂ふあさほけ哉

吉 成

霞中 鷺

春かすみ峯にもをにも隠せども聲は埋れぬ谷のうくひす

謙

春かすみ小松か原にたを引て千年をうたふうくひすの聲

重 一

雨中 鷺

春雨にうつろふ色や惜むらんぬれたる花にうくひすの鳴

郡 次

雪折のあとうとましき竹むらををらはんとすれを鷺の聲

容 盛

さとの子か笛にきるへき竹むらに先鷺のこゑそこもれる

和 風

横笛よきらんと思ひー竹よきて千代をーらふる鷺のこゑ

直

咲花はわたあるものとうくひすもねくら定めよ園の吳竹

曆 子

野	鶯	山のは、霞にそれとみえぬ日もかすまぬふるやのへの鶯	宗	義
谷	鶯	うくひすの鳴聲きけと谷のとのうちにも冬は残らさり鳥	武	虎
野	亭鶯	朝な―野守か庵にうくひすの都へいてん聲ならずなり	八	尋
閑	居鶯	さひ―さをお―計りてや獨そむ蓬か庵にきなくうくひす	誠	之
山	家鶯	世をいとふ人にきかせん山さとの思ふ、―なき鶯のこゑ	弘	恭
		山里にすめば社きけうくひすのまたき初音を娛かりける	道	教
春	雪	花は世に咲ねくてもうくひすの聲いちはやき春の山里	美	矩
残	雪	中空に散かふほとそめつらしき積れはきゆる春のあわ雪	有	秀
野	残雪	咲梅のほひも氷る心ちして春も友まつにそのゆきかな	喜	文
春	霜	みや人の子の日せしのにもらされ―小松の陰に残る白雪	親	知
餘	寒	あ―引の山下いほを春きてもなほ風さえて霜そねきける	榮	子
		川つらの露のみをも氷るかと思ふはかりにさゆるあさ風	盛	壽

五

さは姫のかすみの衣重ねても猶はた寒くさえかへりけり
 山里のかけひの水の洩そめし音もとたえてこほるをる哉
 文 祥

餘 寒 月 雪もまたふるさと寒き春のよの空さえかへる月のかけ哉
 精 文

梅 風 この頃はいつくの里も盛にて梅の香ならぬはる風もあし
 興 文

梅 薫袖 春風ふ花の―つくや落つらん妹かどかむるそての梅あ、
 利 平

窓 梅 月のさす窓の梅かえうつしゑの影さへ匂ふ心ちこそすれ
 小林 祐 之

夜 梅 春風に梅かをる夜は人またぬ闔たにいと、さ、れさり鳥
 徳 惠 子

月前梅 うくひすの夢さまさと梅の枝にかすむや月の情なる覽
 直

霞中梅 梅の花霞の袖につ、めとも香社こはれてひとにしらるれ
 良 秋

水邊梅 梅の花匂吹くふはる風にちりてなかる、にはのやりみつ
 洞 雲

池水に影みる梅の初花はたまもにまゝるあられとそみる
 千 顯

雪中梅 ふり積る雪のうさよりかをる也年もたさえの梅のまつ花
 社頭梅 千はやふる宮おの梅は咲にけりまつうくひすや朝參せん
 野梅 玉はこの道行人も此ころは袖にと、むるのへのうめか、
 行路梅 梅か香をさそひ行手の春風をやなきの糸にかけてみる哉
 或人のもとへ 我やとに梅の香送る春風は君かそのふやすきさつらん
 柳 船出せしたか別れよか結ひけん淀のわたりの青やきの糸
 ねかえしきこのめも春に成にけり先打なひく青柳のいと
 咲花の上にもいとふ風をれと柳にのみえたもしろきかな
 此あさけかすむとみれば春雨のしづくにぬふ、青柳の糸
 のとかなる姿うつして青柳のかけもなかふ、春の川つら
 里川のなかれ一すち行みえまのすむあたりや柳なふらん
 朝またきたか別路のなこりにやつゆおもけなる門の青柳

高陽 小瀧 健 登吉 文仲 美香 昌宏 一絲 幸助 群松 高伴 孫陸

六

柳風静 青柳のみとりの髪のみたれねは櫛けつるへき春風もなし
 池邊柳 池水をかゝみとなりて青柳のうさたれかみをけつる春風
 川柳 行水の煙をわけてひく舟のつなてにかゝるあをやきの糸
 水邊柳 ゆく水に影をうつして風吹は波のあやおるさしの青やき
 野柳 そことなく遊ぶ野末のやなき陰をや夕月の影そかすめる
 若草 春雨のふるから小野もけふよりは色若草となりける哉
 生先の花の色香はわかねともみどりはねなしへの若草
 わか草のもゆるを急く春の野にふれとも雪は跡なかり息
 飛蝶のたもふれ草と摘のこす垣ねのす、な花さきにけり
 春草 降たひに青むをみれえ春雨のめくみおほゆる野への若草
 野草 さくら咲山へをゆけば初わらひ折にあひても娛しかり息
 蕨知春 里人はまたまらさらん朝日さす片野の原に萌るさわらひ

美矩 金三郎 安原 祐之 豊就 邑邦 作信 庸治 清輔 春谷 尙賢 直良 良倫

春 月

梅か香はそこともわかすおほろ夜のみ空に匂ふ月の影哉
くまなきを月の木はれど何かいはむ霞むも娛し春夜の空
かすむよの影は定かにみえねども花のあたりは月そ更行
えるの夜の月社あかね薄ものに包める玉の心ちのみいで
そふとなく遊ひくらして山のへの櫻に、ほふ月をみる哉

茂重 正友 屹子 清信 惟平 峰子 德惠子

春 月 朧

鏡川ゆふへの月のうつれるを曇るとみしをかせむ也けり
久方の月のかつらの木を多まて春はたほろにかすむ也鬼

德惠子 德惠子

社 頭 春 月

照かけも花にくもりて神垣をおほろにみする春のよの月
よもすから花にやとまて山窓の明ゆく空に匂ふつきかけ
きぬくのたか袖の上にかすむらん明方近き春のよの月

守雄 德惠子

山 春 月

咲花の雲まをいて、山まゆのほのかに、ほふ春のよの月
末くみて誰かみるらん梅津川なかれにかをる春のよの月

保躬 顯允

七

春 曙

吹風もそこをかどあかき梅咲頃の春のわけほの
隅田川よとめる月の影きえて花より明るはるのわけほの

親知

春 雨

たつきしの羽音しめりて山本のかすみは雨と成にける哉
もろ共にあすの花みを契りしもあやなく春の雨を降くる
春雨は千草の種か石の上ふるよりやかまのへにもえつ、

顯允

咲いて、匂へる花も眠るふんのとけきけふの春雨のそら

貞致

櫻花匂ふさかりもさひしきは日數ふりゆくはるさめの庭

道英

昨今日ゆすさへふらはいかにせん花も老曾のもりの春雨

湛隆

入とはぬ軒端の花の春雨に眠るはてふとわれとなりけり

實俊

しつづくも世をのかれたる我身には心しりある軒の春雨

孫陸

青柳の糸ふりこへて春雨のふるやの軒をどふひとみな

豊

里 春 雨

此里の花やいかにとみやこ人あすはとひこん春雨のそら

貞雄

社 頭 閑 中 春 雨

春風	社頭風	歸鴈	關路鴈	海邊鴈	春駒	名所駒	雉	雲雀			
春風は花の在かのゑるへして後はかひなくいととる、哉	いみ庭の底つ岩ねにふとねさす松の聲こそ千代のはる風	皇國の花のさかりを告んとやここよをさして鴈の行らん	呼つれて歸る聲のみさやかありおほろ月夜の鴈の一つら	いつのよの契なるらん淺みとりかすめは歸る春の鴈かね	東路の霞かせきは名のみにて空ゆくかりの立もとまらず	あまの子かあこと、のふる呼聲み鳴音かはして鴈の行覽	ふみたつるちりのまかひに久方の朧月毛の駒そかすめる	はるかすみ靡く末野の若草に心ひかれてあさるゑるふま	雲おにもかけりやすらん春霞たつ野にいさむ雲雀毛の駒	すゝなする片野の春を來てみれば霞かくれに雉子鳴なり	み車のすき行のへに鳴ひをまやめてものほる雲のうへ哉
半藏	惟平	吉胤	逸茂	重徳	重武	直	悠久	棟武	尙賢	芳風	泰靈

打かすむ春野をみれば久方の雲おぼるかにひはるなく也	さしのほる日影のとけき小松原かすめる空に雲雀鳴なり	うちかすむそもの變生春たけてふし面白く鳴ひをり哉	いかなれば思揚れる夕雲雀のへにふす身のいと易き世に	あくかれて櫻にくらすのとけさも思へは君か賜物にして	ひふそえも花咲事は習ひけりちるを親木の教へさらなん	よの中の何は思えて咲花の雲よりそらになるこゝろかな	咲を待ちるを、しみて中々に花にこゝろの易きまもなし	蝶やわれ我や小てふとたとるまて夢たもろき花の下臥	けふや咲あそはいかにと春はた、花に心のいとまなき哉	呼子鳥なくなる方を一るへにそゝぬ山路の花を尋ねん	來てみれハ老木若木のさくら花今をさかりの色に出に鳧
伸穂	一富	直良	弘恭	保躬	眞臣	道故	齊藤健	淑蔭	徳子	茂重	利勝

待	花	なかもめもあかぬ餘りにさくら花手折てかへる春の山人	伸	風
待	花	花にきて花にぬぬれは吉野山をなより外の夢もむすえと	喜	文
待	花	いつまでか人の心にかゝるらんまた世にさかぬ花の白雲	美	矩
待	花	鞍たきて日毎にまてと山里のはなの使のたそきころかな	幽	叟
待	花	咲そめーこそその日頃をかそへつゝ、また待わふる山櫻をな	延	子
尋	花	ひと本の山さくら花たつぬとて心をちゝに何くたきけん	弘	恭
尋	花	咲ぬまも花に心のあくかれてけふも山路をたどりつる哉	快	太
見	花	吳竹の一夜やどりて明日もみん長き春日を花にくらゝて	宗	義
見	花	いひまらぬ花の匂に思ふとちくるゝもーらて遊ひつる哉	司	方
静見	花	風よさへ心をおめて此朝け露もこほれぬをなを見るかな	直	
盛	花	嵐山松もありーと思ひしは花さかぬまのきのふなりけり	等	
盛	花	たしなへて花の盛になましより世には思もなく成にけり	一	絲

山家	花盛	咲みてる花のひかりに春のよの明るともなく明にける哉	克	明
山家	花盛	ちらぬまにとく出てみん山里の軒をうつむえなの盛を	亮	歡
山	花盛	みよし野の花の盛をきてみれば月の影さへにほひ也けり	邑	邦
断	花	臥て思ひ起てなかむる我宿の花には千よも馴むとぞ思ふ	保	躬
夕	花	かくなから夢にもみえやあかゝくに暮行庭の花の夕ええ	隼	雄
夜	思花	夜あらしの吹くる音に夢覺て野山のえなをおもふ頃かな	重	秉
夕	霞中花	砂子まぐまき繪のさほに見ゆる哉かすみに匂ふ山櫻をな	武	香
夕	霞中花	たくひなくみえ社わたれよしの山霞の奥に匂ふさくらは	千	尋
雨	中花	春雨のそほふる里はとふ人もたえてしつけき花さくら哉	小瀧	健
雨	中花	立よりていさみて行ん濡ぬとも今さかりなる花のむら雨	俊	貞
山	花	また更に雪にうつむとみ吉野やよしの、山のはなの盛は	孫	陸
山	花	吉野山をなの盛をよそめには雲と見るより外なかりけり	伸	風

藤	水底に匂ふはかりもみゆる哉松にかゝれる池のふぢなみ	眞美
牡丹	一枝は折てもみもやふかみ草ふかき匂のいろそゆゑのき	有秀
菜花	たをやめに摘残されて口あしのいとぬ色にも咲るなの花	幸助
春動物	も、千鳥聲もろき山かけに駒の手綱もゆるへてそ行	興文
春	松みどりなる霞をもれてみゆる哉今一ほのはるの山まつ	喜侶
春眺望	さして行なも手の末もみえぬまで霞にくもる山本のさど	浦雄
春	さほ姫の霞の衣とるはきてきのふにも似ぬ山のそのいろ	高伴
春	川流れての末はたか田にまかすらん花散かゝるやま川の水	有水
暮春	やよひ山まける若葉に霞さへ立わつらひて春やゆくらん	元一

夏部

首	夏	もろかつら昔をからにーめえへて神祭する夏はきにけり	利平
		夢のまに惜みし花のくれなゐを縁にかへて夏はきにけり	隆足
		里の子かふく麥笛もをりにあひてふし面白くなれる夏哉	直良
		はる過てかすみ吹とく天つかせす、一き夏に成にける哉	新助
		わかこさを梢涼しく三日月の影ほのみえて夏は來にけり	永清
		若葉さす水枝に露のたき出てけさなつか一き夏はきに見	壽久
首	夏風	露なからなひく軒その若竹に涼しさみする夏のあさかせ	幸助
山	家	山里はなへて若葉のまけりあひて軒を暗き夏はきに見	きよ子
竹	亭	菴めくる竹の葉末の朝月夜かすまぬ空になつはきにけり	敬忠
	夏來	うさふもまらぬ庵の吳竹に風なつかしき夏はきにけり	清
更	衣	花染の袖のわかれにいと、猶きのふの春の思ほゆるかな	逸茂

餘花

木かくれて匂ふさくらの花みれば春はみ山に猶残りけり
 夏衣きその山道こえくれはたもひもかけぬ花のかそする
 若葉さす那智のみやまは花すらもうきよの外の夏籠せり
 山風のだそふまに〜匂ひくる花はいつれに咲残るらん
 夏山の青葉か中につゝまれてさる春さへやたそさくら花
 山里の青葉にかゝる白雲は今をさかりのたそさくらかな
 消のこる外山の雪のさゆればや咲花おそきまからさの里
 うくひすも老のすさひと若竹に又一ふしをそへて鳴なり
 玄けりあふ若葉の山路分ゆけは春を残してうくひすの鳴
 若葉さす姿やさしく見ゆる哉夏を名に似ぬ庭のくまかし
 みー春の花より夏の若葉山めつるこゝろも枝うつりして
 玄けりあふならの木陰の小川水みどり深むる色の涼しさ

信美 清長 善水 實徳 幽叟 義包 宗誠 政恕 幸助 春萬侶 淑蔭 榮子

新樹 妨樹 月

忘れては花かどそみる吉野山一ける青葉にかゝる白くも
 花咲し春は昔となりけり梅もみどりにいろをかへつゝ
 さのふけふ茂る若葉にかくれ里花に尋一あたりともなく
 月にまた若葉も物を思えする花ちるのちの庭のさくら木
 何事もいつたり多き世也けりうの花さへや雪とあさむく
 かのをかの誰隠家のみちなれや世を卵花の咲うつみたる
 ぬえ玉の闇もさやけし夏くれは月を垣なるうの花のさと
 山陰の垣の卵の花さきみちて夕くれれそくなれる宿かあ
 消残る雪とみるまで山畑の小道つゝひにさけるうのえな
 是もまたまなひの窓の物とみん雪の色なるかきのうの花
 野の宮の榭にましるうつき垣すか〜玄くも花咲にけり
 軒近き花たちはなにほとゝきす鳴や昔をしのひ音にして

良致 一周 喜文 尙賢 健賢 隼雄 浦雄 俊藏 茂音 保禎 昌宏 國足

夕卵花 卵花 似花 雪 窓卵花 社頭卵花 郭公

ほと、きすほのかになのる一聲は幾へ隔つる雲路成らん 保 躬
 さめ果ぬ枕の山のほど、きす夢かうつ、かよはのひと聲 吉 朗
 晴初るさつきの空のほど、きと雲より出る聲あとそきく 石田 邑 邦
 花ちりしわたを尋てほど、きすまつち庵崎行かへりあく 秋 景
 ねぬるよの枕の山のほど、きす先一のひねも娛一かり梟 淺 三
 風渡る猪名のさ、原音つれてそよと一聲あくほど、きす 要
 五月雨の雲間の月のをりをえてさやかになる郭公かな 有 秀
 人ならはうき名やた、んほど、きほ我枕へにたえす鳴聲 とみ子
 櫛のほふゆふへを鳴捨てゆくはいつれの山ほど、きす 利 平
 夢さむるた、一聲に明るよと聞もをしほの山ほど、きす 權
 ひと聲をまつちの山の郭公人つてにきく音さへなつかし うた子
 初郭公 うれしくも人つてならて郭公聞やそつせの山くちにいて 國 足

また人のつてにもきあぬほど、きす今鳴聲や初ねなる覽 介 福
 きの不かも春はくれしを郭公夏山かけにしひねのする 伸 穂
 うは花の陰をとめきてほど、きす鳴一聲や初音なるらん 隆 足
 待郭公 ほど、きほまつよか、れる月影は幾夜ねられぬ有明の空 正 倫
 明易き夜とえりなから中々にまては久しきほど、きす哉 介 福
 尋 郭公 ほど、きすかた山里に尋きて松の上たかくきく初ねかな 一 絲
 聞 郭公 待わふるうらみも晴て照月のさやかに聞つ山ほど、きす 幽 叟
 曙 郭公 ほど、きほ待せしほのかみも鳴一聲のまの、めの空 愛 良
 月 前 公 みつ枝さす青葉のひまにさす月の小くらさ陰になく郭公 扶 祝
 深 郭公 ほど、きす鳴ゆくかたの空みれば月はいるまの山に傾く 喜 睦
 里 郭公 ほど、きす待夜の月はや、落てひと聲なるあさ倉の里 高 雅
 昌 宏

坂郭公	山家公	山中公	社頭公	山寺公	老郭公	旅中郭公	松魚	菖蒲	澤菖蒲
ほとゝきす晴ぬさつきの雲井坂くもより落る聲きこゆ也	世にいてん程近からしともに住山ほどゝきす初音つく也	夏木立分つ、峰を越ゆけもなくねもまけき山ほどゝきす	郭公なにをうなての神なひに夜たゝらたへて鳴渡るらん	待わたるその曉の雲まよりなくか高野のやまほどゝきす	老の身のねさめかすなる幸に山ほどゝきす聞ぬ夜そなき	草まくら結びもえてぬみしかよの夢のあとゝふ郭公かな	はつ松魚いそきくてめせとよふ聲よりうこく人心かな	小山田の清水に生ふるあやめ草あやめつらしく花咲よ晷	故郷のあれ一軒をもあやめ草かをる夕へはなつかしき哉
興文	穉竹	逸茂	容盛	實俊	高陽	豊	顯允	清輔	群松
								愛良	信安

早苗	朝早苗	夕早苗	夜橘	曉橘	五月雨	五月雨晴	水鶏
まつのめかたえふれ草も交へつ、長き日あかす取早苗哉	賤の女か朝とく出て五月雨のふるの山田にさあへとる也	おくれしと急きもとるあ夕ま暮露もさかりの小田の若苗	たち花のかをれる袖をかた敷て夢も昔を一のふよえかな	あかつきのそらたきものと思ひしは軒はの風に、ほふ橘	を止なき軒のしづくにさゝかにの糸も朽なむ五月雨の頃	をやみなく降五月雨に、はたつみ魚すむ計なりにける哉	さみたれの晴しあしたの大空は常より廣き心ちこそすれ
親知	俊藏	足彦	武虎	良致	美胤	實俊	湛隆
						敬忠	幽叟
						誠之	安原之

月影は涼しく残る夏の夜のねさめあはれに水鶏なくなり
夜水鶏 す、しくも氷をさ、くこ、ちして夜深き月にくひ奇鳴也 廣 孝
曉水鶏 天の戸も夏は水鶏に謀られて敲くすなとち明んとすらん 直 弘 恭
夏 月 妹とわか水そ、きたる撫子をあらはにみする夏夜のつき 昌 宏

天の川清き流の氷にしもさらしあけたるつきのす、しさ
風待と小簾か、けたるねをしまにやあてさし入月の影哉 石田 健 秋 景
まはいとてす、む端居もや、更て出れば明る夏のよの月 高 伴
明易さかけと思へを宵なからかつをしまる、短夜のつき 茂 重
思ふとちかたる端おに短夜のふくるもをさき月のかけ哉 道 清
暮ぬまのあつさ忘れて夏夜の月にを物もおもはざりけり 淺 三
夏山のまけき青葉のした菴に涼しき月のかけそもりくる 文 祥
夏の夜を雲の波間に明にけり月のみ舟をこきえてねども 吉 成

庭夏月 水や、たち打たらふ庭地面乃影たもしゆに夏夜れゆき 郡 次
雨後月 夕立に空きりもなれ海原にほ、さき月れうけをこるうな 克 明
夏透竹 月影れ洩くる竹乃ふしれまを短夜をからいねもやられそ 敏 風
樹陰月 露結ふ葉分れ月をくき竹れふしなるらとふやと涼一に 和 風
氷邊月 露みえていぎ、村竹もる月乃影をへと、軒れきよのせ 道 英
名所夏月 おもぬられるひきは靡く影みえて河風は、し夏れよ月 弘 秋
瞿麥 言はれ種とやあらんうるをしに花れ色なふやまと撫子 逸 茂
朝瞿麥 一き島のやはとなて一と咲にけり歌よむ友よ先や告ま一 孫 陸
ききははた開れもあへぬ撫子れ花はめき先ぬ心す社す 泰 靈

夏草 妹とねー葦地床は春の草乃深死のらともありふるふらふ
 庭夏草 花咲ん程をちきりて手にさひに植て秋は茂庭のなりくさ
 野夏草 小松引若なりみよー春日野も面うはせーてまけふ夏くさ
 蚊遣火 賤のや地かほもみえけし遠方やま々こり奥のうひ地煙に
 合歡木 和たし守ひふねもよほそ川岸も先さむる計ねふ地花ぎく
 玉川 風渡るたま乃川せよ船と先て夏をよそめようひみふ也
 鶉飼 ねこたま乃ねさ先さやうひ五月開あめぬ窓も螢とふ也
 螢 夏川れとくされ上を吹うせよみたれぬ露やほぬるなる覽
 夕風れわたる河邊れ草むらに茂ゆもきたきて不ぬる飛也
 窓前螢 吹風お影をちらしてなり虫の光を、し死はどれうちうな
 中とほけて月と風とをみる、夜ふ又たもしほく飛螢のな
 叢間螢 夏草の露れは茂かお風とえてあひく光をほるなりけり
 誠之 宗義 勇雄 精允 顯允 政賢 兼久 弘道 宇廣 久男 曆子 敬忠

行路螢 道地を地かぬへにたてる石ふみの文字もよむまで飛螢哉
 水邊螢 よもほから池の汀地うき草にほたるとひかふ影そ涼しき
 河螢 里川地死しの螢はもゆれとも夏はなかれて涼しか里き里
 海邊螢 ぬえ玉のよるのみるめいあまのかふ玉もにたまと飛螢哉
 蟬 遠かたにまふ降そ、々村雨のえる、梢にせみれあくるる
 蓮 濁江にのけを死よめて咲花の心や世よもはちとるるらん
 にこりよもそまぬ蓮れ花乃色を人れ心にうつしてしかな
 垣夕顔 なほさりのまか死お咲ていふせさを人よ語るな夕顔の花
 村雨の露打ちりて涼まくも垣ねに、不ふゆふのほ地をな
 瓜 うほは香を誰う、ふらん千里行ふほの、瓜の品定先まて
 扇 夕うほは水そ、そとて濡しけんならは扇れ風れたもれふ
 夕立 なふ神の音羽のみねはとくす死て粟田にう、ふ夕立乃雲
 幽叟 元經 貞雄 利宣 俊貞 實俊 義成 正満 眞致 善水 昌宏 直雅

こと方不降てハゆけと此里もそ、いくなりぬ夕立のゆ宛
 有 水
 むら雲のありあらうけて二子山ひとつのふいて過ふ夕立
 うた子
 夕立の雲やありとく渡るらん外山ふり、ふ虹れかけの
 孫 陸
 立よれいあつさ流れて岩あねれ清水き夏のいのち也けふ
 健
 樹下泉 岩茂たふ木陰の清水結ひた、今來し道のありきをきみる
 重 美
 松下泉 松陰の岩井れ水をむらひてハ秋も手よあふこ、ち社すれ
 重 徳
 影うけふ岩ねれ清水むらひては松の千年を汲こ、ちせり
 幽 叟
 山かけ乃清水なる、松陰は夏もよそあるこ、ち社すれ
 權
 小車よ葛飾わたりやりうへせ波たあやせれ風乃そ、いさ
 弘 恭
 岩そ、く谷ま地水れ音た々ハ夏をわたる、心ちこそそれ
 昭 則
 河そひ地柳吹こす夕風よなつもなる、こ、ちこそそき
 元 一
 日さうりえ風も渡らぬ大橋のうへに月まつよはの涼しさ
 精

秋はたてむろ葉れ露に涼しきを散そか庭のたりの下かせ
 信 安
 いへがねしゆた佐も今宵忘れき里涼む川邊の月の清きに
 宇 廣
 日をきぬる松の木かけの夕涼み、乃み秋のこ、ち社すれ
 曆 子
 氷の上を吹こえてくる夕風はぬれぬえかりみ袖うすしき
 武 虎
 玉ちりて流る、水の音たけハき、ろみ涼しあつの夕くれ
 喜 侶
 千町田をみ渡す里の賤かやえ風にとみたるそまひ也なり
 茂 重
 月清み心もともにそみ渡るかけさへ涼しさの、ふあはし
 豊 壽
 隅田河小舟棹さしみをゆけは涼ささあまる袖のゆふかせ
 芳 風
 死てもみようすき衣の浦浪による夕月のかげのす、いさ
 一 周
 涼しきを袖にならして夕つ、の影にえ得汲須磨のうらら人
 吉 次
 白ゆふも風に動きて神のまそみ垣のものは夏なかりけり
 一 學
 涼さにからそも月にうかれ出て鳴かど聞ば夜は白みけり
 扶 祝

水 邊 涼
 田 家 涼
 橋 納 涼
 船 中 涼
 海 邊 涼
 浦 納 涼
 社 頭 涼
 納 涼
 納 涼
 納 涼

松下涼 行かへりかにもかくにもたのむ哉野中の庵の松の下かけ 正友
 晩夏 夏深み稻葉そよきて千町田のゆふ庭の空に秋はみえけり 俊貞
 夏天象 す、まげに虹のかけ橋かけたれと風もわゆるぬ夏の夕空 直良
 夏朝雨 卯の花のゆたの朝あめ寒けさにぬたえ衣も又かさねたり 正満
 夏山 よし姥山花も紅葉も押なへてたなまどははにみゆる頃哉 屹子
 夏野 入間路を朝川わたり分ゆけは夏野のゆゆに駒なつむなり 淑蔭
 夏祓 そここちく心も涼しみな上のたよき流れに御祓えつれば 俊貞
 みやたえてぬさとり流を早瀬川とやくも秋の風ぞ涼しき 美胤
 みろきとる河へ涼しく立浪も秋にかたよる瀬々の麻の葉 郡次

秋部

立秋 さらぬたに心細きを糸す、たまつほに出て秋はきにけり 敏信
 我庵のいさ、むら竹いさ、かの風も身にまむ秋はきに梟 清信
 昨日まであつしと思ひ一衣手の薄さ覺ゆる秋はきにけり 新助
 世の中のたどつれきかぬ山里はみにしむ風に秋を社えれ 吉胤
 初秋月 いつしかも夏を流れてやを水に秋のかけさす夕月夜かな 國足
 大方のものみな夏にかえらねと月のみ秋のひかり也けり 一絲
 えつ秋の月夜を清み舟させい心もすめるたまかそのみつ 豊壽
 しけりあふ柿の木のままをもる月の早くも秋に成にける哉 春溪
 初秋風 くる秋は風のすゐたよあらされて西より靡くのゑ乃小薄 尙賢
 ときはなる松の梢におとすなり色社みえねほきのはつ風 重英
 眺やる野路のまの原吹かせのたともす、いき初秋のそら 庸徳

なからへは猶年ことふ寒からん老のはしめの秋のはつ風
 守 久
 やま松の高き梢をうるるふて空よ音するあきのはつかせ
 守 雄
 秋きぬと門邊の松に音つる、風やあはれのはしめなる覽
 文 仲
 いつも聞軒を乃松れ聲あから今朝よりあるき秋乃そつ風
 譽 濟
 此朝け淺茅か庭も秋の色をみするのかり此露ハおはたり
 八 東
 ひと葉ふや秋れあるしと思ひしか露も散くる桐は夕かせ
 美 矩
 秋の來りたるしや庭の吳竹に玉をつらぬくたさの白つゆ
 整
 人といてさひき菴もれのつから風又秋る庭の萩はら
 秋 年
 いつとなき音もいつしか身ふまみて秋はきに梟松風の里
 弘 綱
 村雨の一ろ、きしてちりむかり昨日の夏は残らさりけり
 秀 雄
 秋たつと思ふころの息りに残るあつさのたへかたき哉
 正 滿
 七 夕 をとめ子の秋のたむけにひく琴の聲澄のはる星合のそら
 勇 雄

年ことに星のあふせをふく船の跡なりことも世に流けり
 八 尋
 今宵のみ夢にはあらたなえたの逢瀬娛しきいと枕して
 廣 孝
 萩のたに吹としもなき風さへもみにしむ秋と成にける哉
 一 學
 耳うとき老のねさめや誘ふらんまくらに近きをき乃上風
 文 祥
 秋風のいがよふけとか玉ぬれの萩よ音の悲しかるらん
 磐 根
 宮城の、ま萩が岡よ來てみれば袖さる花のにしき也けり
 文 祥
 月前萩 つゆ結ふゆふへよとれとま萩原宿れる月よ撓むとそ思ふ
 道 故
 つゆ深きまの、萩原かせ吹はやとれたる月のかきも散るま
 經 太郎
 影やと露の玉萩風すきて月もよほる、こ、ちこそすれ
 雅 言
 雨中萩 雨そ、とまつか、きねの秋萩に花すり衣われはきにけり
 敬 忠
 萩 露 枝たわふつゆ乃白玉ぬきとめて紫おほふれへのいとほき
 榮 子
 野萩露 なく虫の聲さへとも秋の野の風にみたる、萩の下つゆ
 整

萩移袖 ふるさとの人にをみせん萩萩の花の錦に、ほふまそてを 武 虎
 萩映氷 くむ人も秋はすくなきま清水にするたをうつす萩の花妻 伸 穂
 海邊萩 うさよする波の姿に似たる哉いそわに白くさける秋はき 扶 祝
 女郎花 つゆにふし風に靡きてひとかたに心さためぬ女郎花かな 鹿 雄
 薄 我にそにうつし植たる一もとの薄は虫のやどりなりけり 義 成
 野 薄 た、かひの面影みせて花す、き風にみたる、武藏の、原 榮 子
 名所薄 旅人のゆき、の岡のまのほ、きしるもえらぬも招く袖哉 義 包
 故郷薄 ほに出て誰まねくらん荒果しわかゆる里の庭のをす、き 惟 清
 朝 顔 かけうつす垣ねの水のめくるまにうつろひに梟朝顔の花 清 夫
 秋風になひきなからもあさかほの花の紐とくつゆの中垣 義 包
 妹か汲井筒のもとにかゝりきて氷か、み見る朝かほの花 重 一
 藤 袴 脱捨し人もえられす秋の野の花のひもとくふちはあま哉 貞 草

草 花 薄きりの中に日影もかをりつ、千草咲野の末そゆかまき 隼 雄
 虫を撰小たか狩せん武藏の、草をみなかゝ花さきにけり 保 躬
 萩秋花 身にたはぬ色とや人はとかむらん植てみさきり此萩の錦を 信 安
 野亭 草花 とはるゑき宿ならなくよまれ人のきまますくさの花盛哉 作 信
 露 水そ、きば、みし夏をしのふまで夕つゆ寒くおれる秋哉 美 香
 曉 露 野路ゆけば萩の花すり露深み袖ほまわふるあけかたの空 茂 音
 閑居露 白露のあたり玉をは敷たれとどそれぬ宿に誰をまたまし 維 寶
 鹿 もみちはの色たに秋はさひまきにをしか鳴也夕くれの山 昌 宏
 玄かの音に笛をあそする人や誰萩か花咲のへのあたりに 屹 子
 さつをらもあえれとやきくさ夜更て獨妻とふさを鹿の聲 譽 濟
 夜 鹿 さをしかの聲するよは、花妻の萩も錦をしきしのふらん 國 足
 なよ竹の長さよすからぬもやらてつま、つ山にを鹿鳴也 兼 久

曉 鹿 玉くしけ明行峰の鹿の音にあやあく袖をぬらいつるかな 良 致
 田家鹿 さをしかの鳴音さ、ゆ、秋の田に庵もふ翁夜を明せらし 美 矩
 山家鹿 きのはやの我松の戸はとひもせて尾上を過るさを鹿の聲 安原 祐 之
 山 鹿 さを鹿も逢坂山のきねうつらくり返しつ、妻やふふらん 利 宣
 暮山鹿 暮か、る峰の雲よりほろくしと小雨こほれてさを鹿の鳴 悠 久
 虫 おく露もしもとならん夕庭にみさをさひたる松虫の聲 齋藤 清 夫
 露ふらく草葉隠れにすむ虫も音もあらはれて秋はなく也 健
 賤のめよえやとさあらへ古衣つ、れさせてふ虫の聲をる 豊
 秋の野の千草うもとをよすうめて鳴あうゝゑる虫の聲哉 字 廣
 庭 虫 はなたれてもとの野へとや思ふ覽ほどなき庭に鳴虫の聲 御 綱
 月前虫 うちむらふ月は軒を影落てむしの音更る浅ちふのやと 孫 陸
 夕月の影はのなるしものどに誰まつ虫の聲のあはれき 利 勝

き夜ふけて獨すゝゆく月の香にあとれをうふる虫の聲哉 曆 子
 き、かふの糸くりかけし賤かや地軒もふ月にはた織れ鳴 豊
 尋虫聲 そこはかどなくとめ行は鈴虫れそ、ゆふ悲し秋は夕くれ 穉 竹
 深夜虫 衣うつ音たに絶て更るよえひとまつ虫地こそあはきなき うた子
 雨中虫 雨そ、く蓬かもどよあく虫れ聲きく宿のよえ地さひしさ 眞 久
 野 虫 八千草乃花のふしきに鳴虫れ聲さへけへえ今さかりなき 郡 次
 あはきよもふを捨かゑれ聲は也一夜かまね地野へ乃鈴虫 周 義
 夕まくれ野路地つゆ原分行む虫の音にさへぬふ、袖かな 眞 美
 社頭虫 夕くれの雨ふり添ては、虫れ聲もさひしくもり乃神々き 喜 睦
 古宅虫 ったふれ軒れ瓦れ苔乃上をおれうとこよと虫れなく也 竹 子
 閑居虫 人とはぬ草れいゆりに松むしの聲さひしくも更るよは哉 茂 音
 苦むして静けれ庭に聞ゆふはされ松虫のこゑよや有らん 重 貞

旅宿虫	ふるさを思ふ心地ふりたよふあはれを尋ふる虫は聲々	清
田 鳴	露深に伏見の小田おぬは鳴は夜た、はねかく音は寒けさ	義 包
野外霧	呼うはす聲は間近く聞ゆれと人影とえぬ野路はゆふたり	喜 侶
山路霧	ゆく人が越くる人か山もとに聲のともる、きりの通ひち	正 満
河 霧	朝何らも波のうき、り河風に吹なかせれて消んとはらん	義 包
古渡霧	駒とむ影を見えねとわぬり守呼聲死こもされ、朝さり	作 信
社頭霧	まき柱ふと敷てまをばらうのちきさへみせぬ秋は夕霧	好 樹
秋 夕	思ひある人はい々にと思ぬ哉たもひなき身の秋の夕くき	蘿 窓
	庭もせに干草は花は咲も乃をいりてさひき秋の夕くき	扶 祝
	心なきを花か袖も風さえてあはをよる秋のゆぬくき	壽 久
	心より置白露のみたききてわか袖ぬらすあきのゆぬくき	有 秀
氷邊	ゆく水のあききの末も人乃身も思へはさひま秋の夕くれ	敬 喜
秋邊		

名所	吹とぎや松風さひし住吉は名さへうひなきあはの夕くき	文 仲
秋 夕	秋乃田のみ地り豊々き君か代は恵はつゆふなひく民くさ	貞 草
二百十日	走穂の花さくけふに風もなしこやしあどへの恵なふらん	貴 光
秋 風	今朝みきは二つ三粟うあわらうるみもこをきて秋風を吹	昌 宏
	いりも聞松は梢れいらへさへあはれよかたるよは乃秋風	良 秋
	きふとなく身ふりむ物は娛り死ををいね色付小田は秋風	豊 就
田家	秋もや、深くなるこ地音のきてかり庵をむく秋風そふく	直 良
江秋風	刈乃こは岸の村あし打そよき入江さひしくわたるあは風	政 賢
駒 迎	かき、さの橋もと、ろよふみならし雲およ出ふ望月地駒	蒼生比古
月	うた雲乃空また、よふ秋夜は月乃とふねも風やまゆらん	元 一
	大空の月かけ寒しあき風よ雲のころもやほころひぬらん	勇 雄
	ゆゆ結ふ庭のあき秋てる月の影さやかまもやとるよは哉	美 胤

十五夜 明らけく治る御代の鏡こそ今宵乃ゆきればかりありけれ
 ちりはかりくもりもあらぬ望の夜のと空も高さ月影哉 邦三郎
 居待月 夜よしとも誰か告んかしのみの獨居待の月をなかめて 直雅
 對月 三笠山とふ度ことおれもほゆる昔のかけや月よそふらん 宇廣
 深夜月 ねさめして物思ふよはの悲一さ月より外よ知友もなし 誠之
 とひきりる人もうへりし柴の戸も更行月の影身にしむ 邑邦
 松間月 木れまよりほの光く月の白玉は松吹風のみかくなまけり 重徳
 竹間月 くれ竹の葉分の風にもる月のこまかに秋をあらかり臈 直良
 野月 假初のほかたの野への淺ちふに影をつかしく澄る月うな 嶺雲
 里月 夕たりの末吹風に松みえて月おれゆくをかのへのさと 昌宏
 社頭月 松かえを照す光も神さひてかけすみの江の秋のよのつき 利平
 ます鏡かくるはかりに神かきのさつきにやとる月の影哉 正倫

田家月 遠近の田面をてらす秋夜の月を捧げつやひとりみるらん 利勝
 山家月 鳴むしの聲大空にそみしよりむやかふなりぬ峯の月かけ 政賢
 わひ人のうきをまのふの山里は月も悲し影やそむふん 一富
 荒屋月 つくろはぬ壁のくつれも秋夜は月みる爲とありにる哉 種平
 旅宿月 旅やかた語る友なき手枕に木の間の月のかけのまくる 正倫
 幽栖月 出いるも心ひとりの菴なれば我もの顔につたやなめむ 文祥
 閨中月 ねやの戸のひまより細くもる月の影さへ秋は悲ありけり 隼雄
 名所月 えま立や松吹風もさえして月ほみわたるよさの海はら 昭則
 つくも山を山を過るむら雨地一たくの田おに月更にけり 安原 祐之
 とやひをの視乃うとようかへはや繪島か崎の秋夜のたれ 實俊
 江月 我もても物悲しきの深き江よしゆみてやとる秋のよの月 保躬
 磯山の松をはなきて照月のかけも入江のたもしゆきかな 敏

海邊月 みた汐の波のよるともみえぬ哉空行月のかきぎやかよて 小瀧 芳 風

海上月 から人はいかみみるらんつくしむた松浦の沖み澄る月影 健

樵路月 さし登る山路の月を友としてうたふ木こりか聲も亮けし 大 倉

月如鏡 秋の夜の空にさやけく澄月を光ますみ地か、みなるらん 顯 允

山入月 遠方乃山れは高くさし出て軒のほたれにかゝるつきかけ 良 致

江清月 水の江や清き月夜にす、き釣わぬ影をへそ波にうつれふ 保 躬

月多近人 急たて行世のねもかけもみゆる哉昔をうつはつきの鏡に 清 直

鴈 住なれし常世の國に秋風地さちてやきぬるこゆも鴈のね 春 萬 侶

秋もや、夜寒おなれはまつ地をか衣かりかね鳴てきに是 伸 穂

渡りくるありも旅ねのうきよとを慰めかねて空に鳴なり 精

初 鴈 小山田のきり吹拂ふ朝風おさそはれてなくはつかりれ聲 整

旅宿 初鴈 みた月の影さやかある山のはに初鴈かねの聲もさむけし 庸 治

聞そむる聲そかなし旅にして我も夜寒のころも鴈かね 喜 文

これも又家つとにせんくを枕ねさめうれまき初ありの聲 弘 道

月前鴈 うちなひく雲かどみれえ久方の月に聲すむ鴈のひとつら 國 足

わかほして傾く月やまゑふらん峯とひこゆる鴈の一つら 豊 就

雲間鴈 あつとみえりつは隠れて遙なる雲路分くるかりの一むれ 利 宣

霧中鴈 霧よ免ていゆくも見えぬ夕空に秋のほはれを洩は鴈かね 波 兄

社頭鴈 楫取山よのはをさきふ小夜風と思へは月おおつる鴈かね 眞 砂

田家鴈 垣内田の稻葉の雲に聲をあり月よりおつるかりの一ゆら 大 年

秋深く成行ま、にまそらを北朝いゆるさぬわさ田鴈かね 屹 子

あはれなる賤うきぬたや足引の山鳥のをの長はよそから 作 信

吹すさふ風の音さへさひまに物思はそるさよきぬた哉 介 福

遠擣衣 波よする浦の夜寒あすまのほはやまほやき衣打明すらん 庸治
月下擣衣 夜をふかみ音もかそかよ聞ゆなりたる遠妻の衣うゆらん 惟平
照月に賤かきぬたそあこれなる心ゆりてはうたぬ物から 文言
くも里なき夜寒の里れ月又打賤かきぬぬれ音乃さやけさ 石田 興麻呂

7

里擣衣 月はほみ松風ぎえて秋ぬき夜寒の里ふうつきぬたかな 秋景
名所擣衣 月よう桂れ里のさよきぬたそら澄ぬる音のぎやけぎ 吉成
山家擣衣 山里はつゝりぎせてふ虫の音お聲をあえて衣うゆなり 日彰
重陽宴 君か代は猶長月のけふ毎よくむともつきし菊のさかつき 倉子
菊 心してねほしもたてぬ菊なかつ千草よはぎる色は有けり 淑蔭
幾とせ地秋を契りていれ地世ふか植おきし白菊乃とな 壽久
とふ人の袖かとはかり忘きてはまらきさの菊よむそ白露 豊就
世れうきをしらぬ山路お咲きくの花社千代の句ひ也けれ 重一

淺からぬ色に句に植てみる人のこゝろもえらきくのをな 司方
あくて社幾秋のけて句ふらめうきよのちりを白きくの花 豊壽
愛菊 朝ほらけとる我すらもゑまれつゝ、娛しさこほは菊の白露 屹子
閑庭菊 さくの花咲交らすはいかはかり蓬り庭やうとくなりなん 俊藏
菊久盛 菊れ花さきし日數もえらつゆにをりうつゆ庭の袖垣 波兄
月前菊 さよ中と更行庭のつき影にひかりをそふるえらきくの花 清
月落てあくる霜夜れあまけに猶影のあす白きくのを 光長
水邊菊 咲よほふ一むらきくに萬代のうきをへ句ふ山の井のみつ 正秋
あゝあつも千代の友とや思ふらんあさる河邊れ白菊の花 興文
菊臨水 しくなうら千世もすむらん秋毎の花の鏡のきくのした水 尙賢
紅葉 みわたせもみちぬ山もあかり息今よそ秋の盛なるらめ 春萬侶
春山は花よ絶まもみ物そめつくゝあるもみちはの色 稻重

咲花の色の盛にくらふとも何はつまはの木々のもみちえ
 染はて、散もこそせめ山の名の嵐せぬまふ紅葉かりせん
 分いりてしくれぬ山も尋ねみん夕日に深く染るもみちは
 夕紅葉 色深く峰のもみちえとえなら入日さひしく、ふ、夕空
 遠紅葉 大井川水上とほく紅葉して時雨もれぬかめのをのやま
 行路紅葉 行ま、よ色はまさらまつ折し紅葉くやしき秋の山路
 紅葉 薄くこくうつろふ庭の紅葉をいくな露の置てそむらん
 山紅葉 立田山よはの時雨の色みえてからくれなゐに捧むる紅葉
 吹風もかつし寒く成ぬれえ山を紅葉のよまき、にけり
 峰紅葉 むら立の松さへ匂ふ色みえて夕日てりそふ峰のもみちえ
 關路紅葉 木まからの神れみ坂にたむせん關ちの紅葉ゆるせ一枝
 水邊紅葉 秋深き色をうつせりもみちはのたゆくもつも紅よして

淑 蔭
 とみ 丑
 秋 年
 邑 邦
 守 雄
 美 矩
 愛 良
 武 虎
 倉 子
 作 信
 安原 隼
 祐 之

河邊紅葉 そこ深きさ、ろを色にうつそらん鏡の川の岸のもみちは
 橋紅葉 ふむ人もなき山川の丸木は一渡るばつたのもみち也香り
 薦 賤かやの垣ね傳ひよひろこりて錦をみする薦のもみちは
 旅中紅葉 たひ衣や、袖寒しもみちえのよまきをさうふ木曾の山風
 暮 秋 ひむわりの籬の菊もうつろひてまたた暮行秋そわひし死
 曉のかねをかきりに行秋のかたみやつゆの袖おくらん
 惜 秋 えや川のせにもさはらて流れゆく秋をと、むる柵もなし
 暮秋虫 長月の名さへかひなく暮ぬめり籠に鳴虫に秋をのよして
 暮秋鳥 色つたえはひり純柿にひえ鳥のきて鳴えれば秋たけに鼻
 暮秋鹿 を花ちる風にさくひて聞ゆ也あれも末の、きをまかの聲
 暮秋鐘 山寺のかねのひ、きに秋くれて冬おなり行わかたきの空
 秋 雨 落りもる桐の朽葉に秋深くしくる、雨のたとのさひしさ

壽 久
 和 風
 幸 助
 高 伴
 石田 景
 秋 景
 庸 治
 伴 恭
 大 觀
 武 香
 昌 宏
 方 秀
 保 躬

秋	水	冠山たかねの紅葉めにたちてや、秋ふるし三重のゐは水	顯	允
秋	興	思とち酒あふ、めん山陰もちりしもみち葉よせて焼た、	高	陽
秋	思	ふ、ろさへまほふ、秋の夕風よわだてみたふ、袖の露哉	精	
秋	木	里の子かとり残りたる山柿の數もほらはに秋ふけよけり	直	良
秋	山家	きり分てどふ人もな死山里は、れぬ思ひのやる方もなし	良	秋
關路	關路	秋風よ今もとはまー白河の關のむっーのあどとたゆねて	文	祥
山路	山路	山々々の囀る山はくるみ原くるともよしや月よっへらん	弘	綱
那須	那須	秋ふかみ千草の色も虫れねもたえてきひーきのへの月影	嵐	
秋	浦	松風の音も涼しくあよふなりけに唐ことれ秋のうらるみ	高	伴
秋	祝	刈ほけし門田のわせの新ーほり汲つ、うたふ秋の豊けさ	親	知
		千町田の八束足穂のたらひつ、み代を言壽く秋そ樂ーき	興	麻呂

冬部

初	冬	雲風乃吹たたしき何となく冬のはまめのーるき空かな	眞	中
		たぐ霜のうへに吹くる朝風の身よーむをりあれる冬哉	隆	尾
		今もろも冬きたるらー霜枯て招くを花々そて乃あたりふ	豊	澄
		散そむるはー地立枝にもす鳴て夕日まくる、冬はきに見	雅	言
		山地端に匂ふ夕日のたえーに殘るもさひー冬のそり空	正	友
		冬のきて今朝見る山の高根より聲はけまくも木枯のふく	廣	孝
		渡り來る鴈のはこほも重ねても身よしむ冬に成にける哉	新	助
初	冬	あはきにも聞えし風乃音かへて烈ーさそふる冬はきよ鳥	春	萬侶
初	冬	死のふまて露を結ひま衣手もけを置まもの白がさねせり	季	賢
時	雨	わひ人れ袖をや空のまねふらんーくれ勝にも成にける哉	弘	綱
		松陰よわれを殘してつれなくもそ死行ものは時雨也けり	義	成

夜時雨
屋上時雨
田家時雨
山家時雨

入すまぬみ山をめぐり村時雨まされ板やをよ一訪すとも
山きこの冬に常とは思へとも曇りては又ふるしくれかな
小山田のをまねかりかね鳴渡ふ空かたくもるる時雨哉
寒かりし軒はの松の風やみて時雨ふ冬のこゑときくかな
あく虫の聲よりかれて淺茅原まくれは袖をねらすふゆ哉
もとすれ、みな染果てとれは木のつれな死色に降時雨哉
ひとしきり降るかどすれは程もあくやかて過行村時雨哉
うき雲の山めぐりして吹まよふ風地ゆくてに降まくれ哉
時雨かどよひよ聞しえ落葉よて落葉のあとをどぬ時雨哉
風を荒と木地葉も騒くまればやよな不音そへて時雨降也
いゆしかと冬よなるこれ音をえて門田れをしね時雨降也
音ゆる、人あき宿ホーくきのみけぬもどひくふ冬の山里
喜久磨 高陽 直雅 弘恭 道清 高伴 良秋 豐就 喜文 伸穂 曆子 元一

山時雨
山路時雨
海邊時雨

降とみ野原を晴て山はれの虹れなかはを行しくまかな
しくれのみ行かへまつ、冬くまはをの、山道逢人もあー
あひきする夜と出のあまう袖の上よ時雨降ぬ在明れ浦
浪の上に夕日の影をきしなから沖成島根にまくれ降なり
いそ山や見渡し寒きひと松松ひと日しくれて暮初にあり
行は、に遠里小野も近つててくれにまゝる霞はゆはら
ぬれ増す袂をみればやとらぬ人乃言葉も時雨なまけり
ふるさと思ふ旅ね地時雨にはもらねとぬる、我袂かな
旅人のま先りあなる袖れ上よあをれをそふる夕時雨哉
あまてぬよのみどわりの色みせて木葉散しく冬の山里
老々身の朝日待へき山まとは散も紅葉地こ、ろありけり
時雨うときけは軒たにさそひきて風に木葉の降よ也けり
司方 喜文 良秋 春萬侶 清輔 美矩 邦高 郡次 勇雄 高雅 隼雄 羅窓

名所
旅中時雨

落葉

一引れ山また山をたへて色なき風木れ葉する也 豊 壽
 山風乃よき乃梢もさきひきて道もなきまてする紅葉かな 美 胤
 ひとしきり降そさひたる村雨れあこり顔も散木の葉哉 半 藏
 夕落葉 山へへの里は馴てもさひて木れ葉かり散る夕へ也 眞 致
 けふも日は暮ぬと告てねらとふ鵬の羽ふき散木葉哉 昌 宏
 庭落葉 庭もせよ散紅葉を此まよ秋のかたみと拂はてやみん 小龍 健
 閑居 獨すむ我よならひてもみちはの散音さへもえつけかり 利 平
 落葉 ひとり火に照き色は昔ひて散りあしや乃里のもちて 信 安
 里落葉 ねきて歎き折てかきし、秋山れ木葉を風に任とるかうさ 容 盛
 山落葉 谷川地水おさらせる色みれはちり紅葉のふしれ也けり 道 教
 谷落葉 おと寒死谷の川せよ散か、る木葉や氷のくれなるらむ 波 兄
 河落葉 山川よ風れもてこえもみさそ、波のあやなす錦ありけり 群 松

池落葉 ちりうかふ木々の紅葉を池水の玉もとり、む錦なふら一 國 足
 殘 菊 霜かれのまかきよ残る一もとを時いら菊もてそやす哉 盛 愛
 冬もなほ咲匂ひけり松陰に千代をくらへん白死くのそな 顯 允
 たぐ霜よあらうひらねて白菊地はつかに残る秋れ色かな 精 勝
 秋をへて冬にのこれる白菊を千年までとや匂ぬなるらん 利 一
 千代えめし籬のもとよ白菊れ霜をかさねてにほひもふ哉 重 一
 寒 草 霜枯て花のふしれもひと色ふ面かたりすふ小野れ萩はら 義 包
 寒草霜 八千草れち、の錦も色かるとりれ野に霜のはなや咲らん 俊 貞
 あをきてふ露にとたきし秋よりも霜に枯行よも死ぬの宿 豊 就
 野寒松 けらきふるなすの、原乃一つ松獨をむけきすかたせせ 守 雄
 色まざる枯野の原れひとつ松冬の寒さをしふやしらすや 伸 穂
 寒 交樹 もみち葉れちり乃まかひよわかき里し松を嵐に顯れに 弘 綱

木 枯 家つとひひろふ木のとも敷うひぬ我爲に吹峰のこのらし 作 信

このらしも心してふけ松杉の木のまゝにのふる紅葉を 喜 睦

夜木枯 よもすから吹もはけしき木枯を枕乃やま地ちり拂ふらん 仲 穂

氷 起つて、岩井の氷たゞく手もわな、く計さゆるあさうな 吉 胤

々さむしもううふ木のその色々を結び初たり池の薄らひ 祐 之

河 氷 ちり埋む落葉なからふ山里のふそ谷川もこなりはてあり 政 賢

風にちふ紅葉をとちてたのりから錦わりけり谷川のそは 正 満

水やふくも行かひ通ぬわらは哉氷を川のかげとしにして 親 知

田 氷 吹おろそ風身ふえて足引の山のふもと田こほり初けり 永 清

池 氷 風さゆる池の村あし音もなしかれはもとも氷とゆらん 與 一

霜 朝けたく煙はみえてとまり船また霜白きとまのうろかあ 俊 藏

今朝よまは立なん冬の色とえて庭もせ寒き霜をいらうな 清 輔

枯のこる山路のすゝき冬死ぬとまた咲初し霜のまつはな 重 一

初 霜 遠方れさかねに雪れ色みえて初しもさむくたもるれへ哉 淑 蔭

まに妙れ我衣手ふしみ〜とさむさ覺ゆるけさの初しも 屹 子

市朝霜 しらみ行此あけほの、空さえて霜に聲あふいち地あき人 利 勝

野外霜 冬の野の色なき萩の落はふもかきぬや霜にさを鹿のあと 鶴 城

冬 月 照あけもあらしまりの、白妙地雪社つた乃ひかり也けれ 健 城

おく霜に光をそへて照月れかけなほさむき冬れよはかな 有 秀

むら時雨ふりてときたる玉さ、よ更行月の影そこほれふ 正 友

なには江のほしまふほさふ水鳥の床もほらむお照と月哉 う た 子

なれきつる露のゆかり地淺ち原跡とふ霜にぎゆる月かな 八 尋

かの山の梢をのほる冬夜の月をともとやましらなくらん 孫 陸

冬夜のねやもる月をかたけを雪におほめく影の寒けさ 波 兄

山家 冬月	驚の住み山の奥やいかならんよ、よとふさへ冬のよの月	喜 侶
寒山 月	霜こほる色社みゆれか、み山みねに曇らぬふゆのよの月	扶 祝
海邊 冬月	るしまるぬ紅葉も稀になまぬらん松風白くぬゆれよの月	大年
網代	箒火の影もうすれて更るよの月にまうせてもる網代あな	道 英
名所 網代	月影も氷る計もあしる木のひをへてさゆふ宇治のかは風	喜 久 磨
千鳥	うらふれて聲もたのみの濱千鳥夜すから浪にぬきて鳴也	貞 草
河千鳥	打よる浪もたはきて難波うたあしまにさわく友千鳥哉	き よ 子
湖邊 千鳥	難波瀉なみ吹風よあらそひてみち汐さむく千とりなく也	永 清
	かも川の流久しきむかへより君をはちよと千鳥なくなり	直
	志賀の浦やさ、波氷る夜あらにたはを吹れて千鳥鳴也	道 別

浦千鳥	鳴聲の風よみたれて聞ゆふそこのたの浦の千鳥なりけり	興 文
羈中 千鳥	打よすふ浪よとたれて月影もあかしの浦にちとぞ鳴なま	千 尋
水鳥	たひ衣うら悲しくも故郷を去のふまくらに千鳥あくなり	倉 子
	置霜をはらひわひてやねぬ繩の長さよすからをわく氷鳥	泰 靈
	氷どりのあさるひまなく置霜を拂ふつはさや又氷るらん	廣 孝
池水鳥	難波江の浪間にほめる月影をうきねのをしは枕にはして	い さ 子
浦水鳥	明ぬるうときは離る、氷鳥の羽風よよる池のさ、なま	観 道
更	鳴聲も氷るたかまに氷鳥はねたの浦そぎひしりきふ	小 林 祐 之
霞	やめて又雪とやならん風さえてまをる、これは更也けり	吉 胤
	まごささる遠山寺乃鐘のねよくたけて落る玉あられる	元 一
	いぎ、めにいさ、村竹さわかせて心短くふるあられかな	政 恕
	さ夜更て一はの月た、く玉霞たまへ結ふ夢くたきけり	義 成

おもえゆくみし夜の夢をやふりつ、音さわかしき玉霞哉 文 仲

夜 霰 ぬく寝厚くかさねてさぬる夜もふる音寒き玉あられかな 幽 叟

馬上霰 のる駒のゆかた早めてゆく道中風さへ立てふるゆられ哉 清 健

雪 よしの山峯もふもともたへて冬咲花はとゆた也けり 逸 茂

時雨おとつれなくみえし常磐山雪に色をまかせぬる哉 元 武

今日はかり老をみきとや語らばま白雪つもる武隈のまつ 政 太郎

ひと木たに残さぬこれは何えねど花よ増えさけさの雪哉 直 良

大方のちりも埋れてけきはぬ、雪の外なる色なありけり 保 躬

初 雪 言乃葉の友よふ使どくもゆも消なはをしき庭のはつゆさ 一 周

うときぬのうへに降しくこ、ちして散し紅葉に積る初雪 重 一

ねやの戸をた、く霰の音さえて静につもるけさのまつ雪 穉 竹

今朝これ初雪ふきり庭の面の松純緑もいろわかぬはて

嶺初雪 いつの海や船出のあさけ風さえて相摸ね遠くはる、初雪 準 雄

遠山 初雪 春はよの花よおくれし奥山の峰より雪はふりそめよなり 美 矩

朝 雪 さのふまてうる、とみえし木々の枝花あどたもふ雪の曙 整 時

さ、のやの雪たもまろき朝窓は明たるま、お閉れさり鳥 重 時

夕 雪 友したふ聲あたれ也むら鳥のねくらもわらぬ雪の夕くれ 喜 久 齋

降雪にけふもさひしく呉竹のねくらまどひてと、ゆ鳴也 壽 久

夜 雪 よをふめてなほ下折の音はあり竹のみ雪や幾へつむらん 直 良

雨 變雪 さよ更て軒の玉水音たえぬ雨やみゆきにふりかえるらん 小 龍 健 子

雪 未深 行人地木とぎへみえて浅ち原まゑ深からぬ今朝のまら雪 榮 子

深 雪 思ひきや竹の一よのふしれまにか計雪のつもるへしとは 利 宣

松上雪 ゆたかなるみ代のまらしれ顯れて千年の松に積るまら雪 眞 風

雪中松 踏迷ふ雪乃まをりや野のうさよそれとしらる、松の一本 元 一

竹	雪	世の中お争ふ、まも白雪よなひくそ竹のみさをなりける	武
庭	雪	まはゆくも梢につもる白雪の花のよほひを庭にみるかな	宇
田家	雪	千町田のたりほ刈入れみ渡せはとよ年しろく雪を積れる	國
古寺	雪	さひーさは日を降くらす白雪お埋れはてー谷のふるてら	昭
都	雪	大路にもみゆき積りてそなやかに花の都は花にみえけり	高
行路	雪	ふる雪を拂はて行んかくそまき梅散々、る袖とみるまて	嶺
河	雪	降つもる雪に聲ある心ちいて底になかる、ふゆ川地とつ	和
船中	雪	水くらき河せの岩れ敷みえて舟路やそときよはの雪かな	淑
濱	雪	降雪のーら、の濱のほさこちは浪ふみ分るこ、ち社すれ	美
海邊	雪	波の上に雪の動くと思ひーはあまの捨たる舟にそ有ける	興
旅中	雪	海山をへたて、遠き古きとれ思ひも深くつもるゆきかな	義
名所	雪	あちまよふ雲より上の白雪はまはぬふしの高ね也けり	弘
			道

雪	眺中	望	ふりー世のそれにはわらて雪に猶けし死争ふ敵火耳あし	八
炭	竈	幾そちもたてる煙の山なかにほつきやいと、奥の炭かま	眞	
		わひ人の心の奥れそみるまやゆはれ煙のさ、ぬ日そなき	利	
		さむき日にまきれ炭あま焚添て煙よくもる小野の山さど	權	
袈		かさねても猶寒き夜の薄ふほま月もるねやに霜や置らん	正	
爐	火	か死起ーりきくつまづ、埋火に赤き心をかたるよえかな	政	
		老の身の命ありけりさえぬこもーらて更ゆくねやの埋火	重	
		うたみ火の炭をしそへて思とち昔かたりふふくふよは哉	清	
		花の木れ炭さしそるて埋火のあたりは春の夢やむすえん	譽	
爐	閑邊	談	埋火の螢はかりになれふまてかきくつしつ、語るよえ哉	顯
神	樂		岩戸出し日の大神のむかまよりあなたもしろ地神遊かあ	吉
			神葉にぬきとまかけてまふ袖お月澄わたる玉ーきのおは	吉
				成

豊明會	皇のとよのほかりの明らけく治るみ代のあみほそひあ	周造
夕鷹狩	はしたかの羽風寒けく成にけり夕日は遠の山にのこきと	常孝
早梅	新よみひらき初さるあーたより心有けに、ほふう先哉	敏藏
雪中梅	あけ稲よ風をぬぎきて賤かや地はひりの梅を花咲にけり	俊藏
雪中梅	埋火のあたゝは春のこゝちしてとくるやむ後の梅の下紐	幽叟
雪中梅	地とかあふ春の隣の雪の中に匂ひ出にけりうめのそひ花	誠之
雪中梅	ぬる雪ようつもき果し宿なから匂ひいてたる窓の梅か香	庸治
歳中鶯	いとはやも年くれ竹の籠のうさお獨春ーるうくひの聲	壽久
冬人事	賤の女かほた焚つ、もうむ麻の暇なけなふ冬れよは々な	正満
冬酒	室の内に梅みる友とあたゝめてくめは春めく新しほり哉	保躬

卅四

冬聲	秋のこゑ聞ゆくゑたる後なれや窓うつあられ竹の雪をれ	徳辰
冬山	ゆら鶯の聲のみ空よたふえの、月影さゆふゆの山のな	高伴
冬日望	見渡せはいと、草木れ冬枯てめお立ものはぬえ地白ゆき	隆足
芙蓉峰	遠近おゆはの昔やもゆれみえてゆふへさひーき蘆の冬枯	清輔
水邊望	夕くれは鐘の聲のこたとつれて人めりれゆく冬の山をら	宗義
冬野	打招く尾花か袖もーも枯て穂綿作むへく野をなりみちり	政恕
冬木	さひふまで虫よ花よと先てー野も人めより先枯初おもり	一絲
冬鳥	百草の花よあそひして、ろのみのこるふゆ野の霜の色哉	一文
冬山家	さひしをも又のとけーな梢とな雪の花さく時はきふたり	群松
冬神祇	夕日さす軒はのもみち散てえて鳴かね寒し冬のやは、と	豊水
冬神祇	とふ人もゆらしの庭の跡たえて落葉か上につもる白ゆき	佐々
冬神祇	朝くらの聲もきやかに降積ふ雪れもしゆきまふの神わざ	豊水

除	閑	山	市	待	歳	歳	待	歳	歳						
夜	居	家	歳	春	暮	暮	春	暮	暮						
いつそあれと身にひ、死屍老まざる年のなこりの曉の鐘	大かたの世におくれたる山里もよそにかえらぬ年の暮哉 行年をとゝめんと何思ふらん獨すまんとゝめいほまふ	諸人の騒くかけふはふん年の幸をうるま地市よもとむと	今をらにひま行ふまのくつわせら引かへされぬ年の暮哉 ふる曆はき捨ならなにとなく暮ゆくとしの惜はる、哉	人比みう心たれなし根よこもふ小草も下よ春やまつらん	貧しくて今年も暮ぬ然はあれとなるれを押し物も思はは	ゆふさすきかくる袂に霜さえて大和を琴の音も澄よけり	精	足	弘	吉	永	信	保	方	隼
雄	升	禎	安	清	胤	恭	彦	恭	胤	胤	胤	胤	胤	胤	胤

戀部

戀	初	忍
長うきと神お祈りし命さへをしうらぬまで人をこひつ、 吹かはる人の心のあきうせふゆゆ地命のきえぬへ死かあ 忘らる、此身とまらば玉の緒を長くもろなど何祈るへき	難波津をけふ書そむる結文いかよあしてを人乃もとかん 分いらむ奥やいかよと思ふまで袂つゆけきふひの山くち 久方地雲おれよそに聞より初鴈かねのねこそなかるれ 娛一きもつらきも戀れならはしと思初一もきのふけふ哉 秋地田のほのみし妹かたもかけや心色付とゝめなるらん ふみ迷ふ心のみちの奥深くいたてしのふと物うかりけり 心にたまのふとすれとゝひもなく人目らぬは涙也けり 亂るへき穂おは出ぎ一と薄一乃ひに袖はよし濡すとも	ふみ迷ふ心のみちの奥深くいたてしのふと物うかりけり 心にたまのふとすれとゝひもなく人目らぬは涙也けり 亂るへき穂おは出ぎ一と薄一乃ひに袖はよし濡すとも
義	徳	泰
信	子	靈
健	弘	綱
幽	叟	叟
敬	忠	忠
淑	蔭	蔭
政	怨	怨
逸	茂	茂
秀	雄	雄

心かにせん忍ふ地山は岩つ、し言ねとそまど色に出るを 重 徳
 もらさしと思ひせく也谷河の落葉のくれの氷乃かよひち 忍古彦
 音なしれ灘とはよそにいそるとも玉ちる計物たもふ身を 泰 靈
 しらすへき隙社なまれ玉垂の小簾はひとへにまのふ心を 道 英
 なに故お岩まの水のいひ出てあき心を一とよみせけん 保 躬
 言出戀 若草のそりかに聞ゆぬるより絶とも、ゆるわり思ひ哉 良 致
 聞 戀 ひとつとなく物思ひ草心にてつと一は妹かつゆもいらすや 顯 允
 思 戀 我ふひは淺茅か下を行水のうら枯よりあふはまにけり 正 秋
 顯 戀 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍 小龍
 名立戀 涙川せくとはすれとあた浪の袖地まのらとつか越るん 敬 喜
 いろよせん身を朽ぬとも洩ぎしとし乃ぬに餘る袖の涙を 庸 治
 なとてうくまたたけうき名乃立ぬ覽涙地外に洩ぎ、りしを 逸 茂

いかよせん身は埋木となり果ぬうた名取川しはむ思ひを 元 一
 何事ので、めくらんと物こ一ふきけを我身のうき名也鳥 喜 侶
 絶 戀 小山田はひたの懸繩ひたふるにいつよりかくは思絶けん 重 徳
 絶久戀 昔みし垣ねまはらに夕顔の露のなさけれあともと、先び 豐
 かはらしの言のま今え枯はて、昔しれふの草そ一けれど きよ子
 祈 戀 思ひわひ浪にまゐせて貴船川よるへあぬせと先祈るらん 茂 重
 きふね川まれの逢せを神々々て祈ふまるしも浪地白ゆふ 義 包
 思ひ餘る心を神よゆふとそたかけて祈ると人をしら一な うた子
 祈不 祈れとも我にはりらたうき人を誰に結ふ地神やゆる一、 興 文
 逢戀 かならそと契して人を松風の音をもそれとおほめかれ筒 勇 雄
 契 絶なんと思ひままでの玉れ緒に行末かけて契るうれしさ 尙 賢
 世二 散て後々になる花をこてしよりうけてこん世も契初てき 容 盛

待戀 ちえ、又別る、ほどもつらからん待間やこひれ命也ける 高陽

待久戀 思ひきや君を待とて山のはにかたふく月の影をこんどは 茂重

逢戀 手枕よ、ふとどめか黒髪の長髪を後のさたりともかな 一絲

稀逢戀 袖に置涙れ露のたまはこほをほひぬるよはも有けり 盛愛

逢増戀 ひと度といれしこと乃悔しきは逢し後れ心なまけり 小瀧健

夢逢戀 さめてなほ其面影乃身に添ふや逢とみしよのゆめれ手枕 吉朗

曉別戀 いのばあれとなこりをまきはさし櫛の曉たきれ別也けり 高陽

後朝戀 鳴どり乃聲も悲しれ別ちに地こるを袖のなみたなりたり 波兄

衣手のかわかぬ露にし地ふ哉たきてわかれし朝かほの花 大年

わかれては夢うつ、とも分兼て心は身にもまきはぬけさ哉 義包

きぬし袖乃涙に影とめておれを分るあま明れつれ 守雄

卅七

馴戀 こひ衣きなれし門守ふ犬もとかめすなりよけふがあ 顯允

恨戀 うらみをは心にしめて下紐の解ての後れふとなり、 茂重

つれなまと思ふ心のかた糸はいと、恨をむすひそへたり 利宣

しら雪の消行はるも解やらぬ人をうらむつもり社すれ 方升

契置し人地心のあた波は、やもこえぬるほるのまつやま 逸茂

から衣娛えさ包む袖もなしいつはりもちて纏やしぬらん 石田秋景

數ならぬ身をや種にて住吉の岸に生けんみひわそれくさ 武虎

浦千鳥あとをみるにもわたりみれ深く成ゆくわか思ひ哉 好樹

我妹子にめぐりもあはて小車の我獨ぬるよはそさひしき 直雅

心なく雲なかくえそなかめやる月や思ひの行へなるらん 直

神あけて誓ひま君か言の葉にあまる情やたのみなるらん 廣孝

ぬまさうにあひぬふ閨の手枕も涙なからよ夜を明しけり 清

無實戀

憑言誓戀

遠戀

獨寐戀

見書戀

被忘戀

戀 命 こひ故不捨る命をもしまぬえうしとみ一世の習なりけり 實 俊
 春 戀 こよひとてま成る心もほそ殿のたほろ月夜そ命ありける 弘 恭
 夏 戀 菫摘む春のすさひ事よせて今日は末野ふいもと暮しゆ 政 賢
 秋またて垣つみ咲るからあゐる乃色も出へきこひもほる哉 敏 之
 冬 戀 我中はかれえておたり言れ葉の上も冬を霜やたくらん 美 矩
 戀 天象 思ひわひ心も空ありぬるをえらす顔にも月のほむらん 元 一
 寄 空戀 思ひ死やうはの空なる浮雲にうかれて物を思ふへまどを 誠 之
 寄 月戀 契み一人は影たよさぬ夜の小ほさしのそく月も恨めま 敬 忠
 照月はほゑ影まろく成なりら契りーことそ空たれめなる 謙 良
 契つる人はそらなる秋のよの月影をむくあか先のみりて 愛 良
 寄 雨戀 雨となる雲のかよひの中空をくる、夜毎に打なかめ成、 とみ子

寄 霞戀 櫻花おほふあすこのらすきぬま包とあまるを思ひ也たり 義 成
 寄 雪戀 降りさる雪に行來地道絶てぬともみぬこやうらと也々色 祐 之
 降つるも雪より野のみち絶て深き思の身をこやりつ、 庸 治
 寄 露戀 言の葉のつゆおも心たかる、はわたなる人のわとを草哉 一 富
 寄 霜戀 吾妹子かたきて別れし朝霜のちぬまをきへよ忘かねつも 正 友
 寄 氷戀 いっならん人の心のうす氷行するかきてむすふちきりも 重 徳
 あふあとのと、ふほりぬる古井筒解て汲へ死春を待る、 兼 久
 寄 山戀 せよとみし人お心をたたく山何ろはまけき思ひあるらん とみ子
 寄 川戀 思川うれしきせおもわたりた、てうき年波をかきねつる哉 直 良
 寄 橋戀 片れもなき人よ心をかき橋のかくていりまでよひ渡る覽 文 樹
 寄 井戀 幾多ひかめくをわひても車井の深き思をいふよしのなき 弘 道
 寄 海戀 我戀は心つくしの海なれや人しらぬ火れむねにもえ成、 敬 喜

寄浦戀 いつまでか心ゆくしに松浦瀉ひれぬる魚も數をらなくに とき子
寄巖戀 うらみてもうひ社なけれ動なきいと得よ似たる人れ心は 港隆
寄名所戀 我ふひはあてたか原のたな薄招くはかりに日を送りつ、 扶祝
寄木戀 あこれてふ詞の露のう、らすと戀れあけきや朽果なまし 八束
ときは木の露洩をまの言乃葉もい散初て名は立けん 喜文
寄松戀 ときは山色にも出ぬひめ小松何よあかる、風やふくらん いさ子
寄竹戀 吳竹の一よ逢としなこをより身にうき節れ立登はりつ、 道繼
寄梅戀 人しれす袖まえめつと思ひしをうたな立枝れ梅れ移り香 清信
寄柳戀 春風のおそふまに――青柳の靡くを人のあ、ろともかな 喜惣治
寄花戀 花の色はうつろひ易し我戀えいうよ染たる八一ほなふ覽 邦高
寄草戀 我宿の園生よーたる水たてのから死思ひを摘とーらすや 和風
寄鳥戀 思かねもとの古巢や尋みん通ふつためのかひもなくとも 御綱

寄獸戀 結ほ、れ年をへふけりいつか我解て伏おの夢をみるへき 保躬
寄魚戀 池に住もふしつか鮒たかればも忘られ難死よひもする哉 秀雄
寄螢戀 しるらめやゆを命の螢をへもゆる思ひれたえす有とは 實俊
寄虫戀 ぬれめゆる人待宵は閨の戸をきせてふ虫の聲もうらたし 道別
結ひにし契え絶てさ、るに地糸くりうへーな香く頃かな 良致
寄劔戀 わた人は劔ならねと我こ、ろみたれや死とも成よける哉 興文
寄筆戀 うえらーと結ふ契も水莖の流きてよそにならんととらん 五郎
物にはぬふて社ともに忍ひあふ心のそのいのち也けれ 一周
寄硯戀 淺からぬ硯のうみの心とはかきやる筆れふみ、てもまれ 吉成
寄笛戀 こすくてふ名をのみ何に頼けんよそよ成行よはの笛のね 方秀
笛地ねをき、そめーより面影もしらぬ心の先うこきり、 豊壽
寄扇戀 うらもの、薄き情乃うらねもてみするは妹か扇なりけり 實俊

寄鐘戀	かそふれは待夜なからに明の鐘いかよなりたる契なる覽	昌宏
寄糸戀	あた糸をよなたうあたよるへなと只一筋お頼む也けり	八尋
寄衣戀	思ひきやよよひきつねの皮衣恨な死身のこゝられんとは	實俊
	いとせめて夢よんとてさよ衣かへそ現はくるしうり是	盛茂
寄帶戀	此頃と二重もと重に引結ふたひた、一さ乃戀のやつれや	淑蔭
寄枕戀	思ひわひ枕に結ふ夢よりもさめて一たひあふこともかな	清輔
寄衾戀	つくしと思ひ重ねしあつ衾などの薄いと人れとらん	利宣
寄簾戀	うつろはぬ人の心れ面影もあはかにとゆる玉すぬれかあ	直義
寄埋火戀	更ぬとも猶とひきませ埋火の底乃思ひは死ゆるまもなし	義信

雑部

天	さほくみゆるを雲のわさならん只大空と縁なるもれ	維寶
月	うき雲は立うくせとも大空にもとより月のかけを澄けり	吉胤
星	大空に數もしられを顯はれて星よさやけきよえもわり見	屹子
雲	山とみえ浪とたちつ、定めなれ雲こそせの姿なるら先	幽叟
暮山雲	入はて一日影もまとし匂ひつ、夕くをしらぬ峰の白くも	昭則
雲出岫	朝ほらけ生駒わろーやたむむ覽外山の松に雲れり、をる	光長
雨	けふもまた降くるみきは晴行しき地ぬの空も雨間也けり	真中
關路雨	降雨に雲ふむ道を行あつむこ、ろのこまのあしからの關	正誠
	たひ人を行もかへふも急くらん降くる雨にほぬ坂のせき	伸穂
富士山	世に高き山はほれとも日の本れ不二の姿に立まさらめや	昭則
名所山	幾春々花のそみてかくはしく芳野は山も世に匂ふらん	隼雄

ましら鳴聲をも今を聞なきて住よくなれる山かきのいほ きよ子
 山家燈 づつねえや影を去るへふ山陰の主もーらぬ宿のともし火 永清
 山家夢 住なれぬ岩ほの中のうさ、ねははた世に渡と夢のうき橋 鶴城
 山家風 山里になれてえきけとぎひしきを夢地あと、ふ嵐也けり 弘恭
 朝夕ふ心のちりもこらひきり我やまかけの庭地まつかせ 直良
 閑居 世の塵を連れてはめふ松かねの岩もる氷の音をまつけり 道英
 閑居夢 水聲 よもたふ地宿に住身もよよ通ふ夢は心乃ほるよそ有ける 明盛
 古寺風 山松のちとせをかけて古てらの軒の嵐のねとそみよしむ 守雄
 送 別 別れ行君かなこりを我袖にうつとや秋のつゆのゆふくれ 敬喜
 行ひと送ふ袂も諸ともにあほはけふのなとた也けり 宇廣
 旅 ぬるぎとへよるー夢を通へとも現よあへる日社遠けれ 一糸

ふるさとを出て久しく成ぬれば習はぬ旅もなれにける哉 倉子
 古さとを雲のそたてと思ふにも旅の空なる月はなつかし 貞草
 春 旅 山路ゆく旅の衣にさくら花ぬかゆるまてかに得ふそる風 波兄
 夏 旅 立よりて汲や涼まき旅人のーはしわつさをわすれ井の水 豊
 須磨の いにーへに散し青葉の笛のねを今をぬきそへすまの浦風 信安
 浦よて ぬれて鳴聲を枕にかたしくか夜た、千鳥とあひ宿りして 五郎
 浪あらしきおなの漑よ舟とめてたひて待まの浮ね々あしも 權
 唐 琴 泊 杖のむえかり老ぬる松ながら若木にまさる風の音かき 一富
 に 泊 杖のむえかり老ぬる松ながら若木にまさる風の音かき 一富
 島 松 名もまらぬとなれをーまに船とめて枝面白た松をみる哉 吉胤
 松 積年 動なきいはねの松を君か代の幾千世ふへきぬめしなる覽 正倫
 多胡の 老松と ところし處に猶萬代の聲にありみとりをぬく多胡の老松 喜久磨

砌下有松 松入風琴 薄暮松風 杉樹久風 柳竹交枝 無花果

よろふひれ聲を朝夕音りきてみたりの松の陰そ木たゑき
 とりしにをかまいはの松乃風六乃を琴乃音よ通所、
 世を捨て身も夕くそとなる菴地軒はに何をまつ風のふく
 久方の天のかく山いやたかにたてる鉾杉いくよゑぬらん
 こりかけし柳の糸お結られて竹もうた世のふーや忘れん
 風にちる習ゆるよと花さかてみの成出るものはいちまぐ
 あらは、や人の心も二葉よりほを母にまけふたけ地縁に
 月花のいつれはほれと明くれふうきふししらぬ窓の吳竹
 うきふしをよそまなしたる吳竹かへぬ操と心ともかな
 幾代々かめてたた節を重ぬ覽みはしの竹もみ代に習ひて
 大君のゑ代もろともおきかえぬく縁乃竹は久ーうるらん
 さかえ行み代よならひて吳竹れ縁の色は千代もかえらー

豊水 弘恭 作信 春萬侶 敬忠 守雄 忠景 吉成 直良 敬忠 隆足 重一

蓬 鶴 晴天鶴 浦鶴 鳴鶴 鶴立洲 名所鶴 竹林鳥 鷹

吳竹の縁ふらくもまけふ哉幾代かえらぬみよのためしよ
 大御代れ露の恵にみどりそふ竹のさかえと限りしられそ
 朝日影にほふみかきの吳竹を千とせを契ることり也けり
 横さまおひろこふ垣の蓬生は庭のをーへもしらそ顔をり
 垣つ田に群おて遊ふ友鶴の千とせをよはふ聲もなつかし
 のとゑも明行空の鶴かねはゑ代にさ、くる心なるらん
 雲元えて光のとけき大空にみ代長かれとたつれなくらん
 うちはへてきふと布より白きよの月お鳴也浦のたつむら
 沖たにに群おふたつの聲をくた千年の波の寄かともみむ
 若の浦によはひ重ねてさやかにも萬代よはふ蘆たつれ聲
 くれ竹れ縁も深き君か代に實をえむ鳥もいまやいつらん
 百鳥をおのうたむるとみなしつ、獨高木おやとる大たか

喜睦 義成 正倫 蘿窓 直良 扶祝 重雄 兼久 直三 清輔 尙賢

牛	暇なく重荷負つゝよれ中をうゝともいえて渡るをうき	盛
狐	さひきよ小雨そほ降まの原もなくやれぬの夕暮の聲	元
猿	こから一の渡る高ねに月落てうきをまゝらのよはよ鳴也	政
海	腰々、むまて其色もかえらぬは海も老たる幸よろ有る	俊
巖上龜	おのつからおのゝ齡の萬代はいはて岩の上よみえつ、	安原 祐
太刀	身を守り國を治むるつるき太刀秘置みよ静きりき	正
筆	みりくきの筆の林地奥よこぞこ、ろ乃花も咲へありけき	有
	うきなかすふてのすさひも面白し硯の海も打むかひつ、	榮
	皆人乃思ひもゆるわさなれば假初ならぬ筆のほさひや	倉
	世れ人れこ、ろの色のよしおしもうたすも松の煙也けき	實
紙	紙屋川清きなかれに氷くきのぬかき心をくむそうれき	兼
硯	ふみこれ遠き昔の人をきへ友とすゝりの水のが、みよ	安原 祐

碁	善あしのもくつか、んと筆取て硯の海によらぬ日そあき	兼
	一とせの日かすを石の數おしてあくも知を打暮しけり	親
鏡	心せよたなし石うつ友たにも白き黒きればれをあるよ	敬
	よーあしは姿よりなほはす鏡ほどの心もうたえてやみん	有
琴	古の船木はいか、知ねとも是もことなるねろきこゆれ	興
	ひとすちの糸よりかたてとま琴お千々の思を調へぬる哉	文
一絃琴	ひと筋に心ひかる、ほま琴をいとおもしろに調なふらん	高
漁舟	一筆れすきひもえらぬ業なからるよよく似る蟹の釣舟	喜
感思	老の坂分るま方をみかへればけはしれ道のたほくも有哉	元
感遇	葉れほれば風のゆるさぬ露の玉物は高れあわやぬかり	淑
光陰	昨日かもしれ日せし野をきてみれも虫鳴計をやなりに	常
歌	言れ葉の道れ奥をろみまほしれ壺の石ぬみふみも迷はて	清

福祿壽 誰も皆あえまじ星地なれふ神仰かぬ人はあらうと思ふ
書 贊 あまふつ乃すもる松は陰よ死て千代の始乃聲をきく哉
訪隆中 ともつひに埋もれ果ぬあふまじれ心深さも雪に見えけり
草廬圖 川中島戦記をよみて
喜 磐 根 文

朝きりのはぶ、よこ色を千隈川車々、まじ音れきこゆる
保 躬
たくれしの一村雲を思ひたけよその煙のねきすあまけり
作 信
從軍行 御旗あけてさらはと出るま心に身をもいのちも願はせし
顯 允
明治のはじめの年京都の守衛に仕奉り錦旗れもとよ侍りて

取よろふうふとの星に耀きて月日の御旗みればたふとま
豊 永
豊前國小倉に陣ありて
たもひ死や鎧地袖を片しきて企救の濱へに旅ねせんとえ

明治十八年七月廿九日山口のあかたの廳に みゆきあらせたまふ

ときかゝるくも二首を奉る

とくるはの音ものどくに引牛の世にも稀なる跡や残らん 直
高御座雲お遙よ出る日を、ろかみまつるけふもほる哉

明治十八年九月廿二日 皇后宮玉川に行啓まゝて小結の
すなとりをこそあはしける事に仕奉りて

たま川の清き流の水々、と 君れ御影を千代もと、めよ 政 恕
清國よ事あらむと一けた頃よめる

こと國にいつしかもとん玉はしふ煙にかすむ春のよの月 弘 道
さき草乃とつれ教をまゐ、ろれひとたふ守るよもの國人 直 雅
とは、やな語もせはや傳はりし神代なからの御代の古言 勇 雄
あふくふも餘りゆりけり日に月お學ひれ窓の開け行世を 重 徳
花さうは外國かけて句はなんをへの庭の大和あてまゐ 和 風
朝旨三條 皇典講究 學校徒

沙本毘 田道命 護王守 武内神 道鏡 喜撰 業平師 西行臣 重盛師 經正臣 平敦盛

ちちはなの匂も共にうるはしく千年に残るよりの、山
 せかれてえしはしよとみて流れつゝ濁も果ぬさほの川浪
 常世より採こし香の木實すらかくならんとは思さる監
 ことへに世を濁きまの幸魂清光御名社まさしかりなき
 國は爲くにをことむけ君かためきと忠なる臣そ此おみ
 はる神のまか事にのみままふりて道の鏡の世おそ疊れる
 道れ住よをうち山の郭公かすかなる音そいとゆかし死
 こと、ひし昔なからにそみぬ川波は綾瀬にうらふ面うけ
 もみちせし高雄を出て西へ行月はよはにそ照まさりける
 茂き木の中おみさをの正しきを老木よも似ぬ小松也なり
 夏山のあり明乃月をあどふとて落る都のそられあはれさ
 うち招く扇乃風よる浪をそまけ浦わのあわと死えぬる

群松 淑蔭 八束 淑蔭 勇雄 河野守 秋景 國足 扶祝 文言 國足

熊谷直實 梶原景季 小督局 實朝公 青砥藤房 藤房卿 文貞公 北島准后 楠公

招かる、扇乃風おながくもよせてかへらぬ須磨地浦波 敏
 後の世はひとつ運と契たきて涙のたまやそてにかけ、ん 國足
 武士のえひらふささも一枝のうめこそ千代の匂なりけれ 祐之
 た、いはし心のたぐにほむ月の影もうき世のきかの山里 八尋
 さはしりし霞を消て言のはの玉れと残ふなすのしのはら 親知
 なめり川五十せおかへし松の火を淵より深死心なるらん 清夫
 ゆく雲おとせまかせてもむらきも地心おろ、る九重の空 誠之
 まこ、るも今はむなまと思入山よてもなほ袖はぬれけん 利平
 臣の道つくは誠のいつをりをまらぬーなどの風も恨めし 一絲
 ろき流そ君いまきは吉野川濁らぬ水もかひやなうらん 喜文
 吹拂ふささの風のたやければ立もおよはぬよも地旗雲 利宣
 千萬に心つくまてみなと川君かいそーのそこひしられぬ 俊貞

義朝臣

君か爲つくはねかひを稻村のいなともいはて神や受らん

吉胤

長年朝臣

君を思ふ赤き心のはかなくもなと黒丸れつゆときえけん
白玉を船の上山にむかへは心のひるを世にもしられし
生うめし其二葉よりかくはしき名に社てれ楠の若はえ
かへらゝの其言乃葉まかねてよと大和心乃花ろみえける

喜睦
兼久
正満

兒高嶋徳

世よ匂ふ櫻かもとのうら歌え大和ふろの花にそ有る
はそらをの心地色は万代にちりてもにはふ花のひともと

守雄

上杉謙信

千隈川さかまく水に澄月の今あゆきよきかけそくまるゝ
車井におろすゆるへのぬた心人は汲ともたもはさりけん

新助

契沖順慶

西山れ木のまほのみや墨染地袖のうらなる玉はもりけん
世を救ふ心のつゝみ高ければあふふゝ氷を治めたりけん

磐根

老聃

道としもいとて道ある古のたほきとちをそ君そしらせし

喜文

齊宣王 ひつしめて牛よのへよと一言の君か情やよをおふらん

小林祐之

張良 木かくれてうちもらえ、も天地下に鳴ひ、く槌の音哉

直

王昭君 まひなしに花の姿をうつさせて遠方人となりになるかあ

弘綱

鐵木兒 思ひいる壁のくつれにあはを其雲およ升る道をありけり

喜文

武士 もみち葉と散ての後そもの、ふれ赤死心は人よみゆらん

真臣

軍人 たは死える命をかねてなきものと仕まりれる益荒夫乃伴

清景

市隱士 吳竹のうたぬえ、なき世の業をみつゝよそなる市の隱家

石田秋景

訪隱者 尋いる山松の戸れことのねはのかき一人れすゝかなる覽

一絲

遊女 垂乳根の親の爲にと沈むみをなとうかれめと名付初けん

顯允

述懷 數ならぬ身はうき節に吳竹のいつまで茂きおもひなる覽

昌宏

身おぼまる思ひを残す水莖の跡をは人のあはれともみよ
何事をなるとはなまに空蟬の我よいたくも更にけるかあ

保躬
榮子

寄 寄 寄 寄 寄
 雲 道 竹 炭 紅
 述 述 述 述 述
 懷 懷 懷 懷 懷
 軍 寄 寄 寄 寄
 人 述 名 述 炭 述 紅
 言 志 懷 所 懷 竈 懷 葉

きくもうーふ、世の中のきかえらに耳を洗ひし人の例は 八 尋
 光なく朽はてん身を恨みすはゆれも螢もあつたさうまー 謙
 草のくれほまともみえぬ谷川の清きこゝろを知人そーる 和 風
 おはれ世を心を空になくさるん月雪花とめをうつしつ、 文 仲
 朝を夕な思ふ心のさましーにやはるに似たふ空のうき雲 湛 隆
 きましーよちる言の葉に埋もれてふみ分かぬと敷嶋の道 正 友
 ぬけ出ー一ふしもなく徒によをくれ竹の身そあをきなる 泰 靈
 起ふを風にはかせて吳竹の世にさからはぬ身社安きれ 壽 久
 もみちはのちり行色とみてーより風お我身も思ふそやき 亮 歡
 山里お世をいとむつ、炭かま乃心ほそくもたつけふり哉 祐 之
 世れ中をた、徒に住吉のまゆひもなくとーそ處にける 茂 重
 名を揚し遠つ祖にも劣らしと荒木の眞弓けふた先しみる 義 信

くさしーのうたの中に

いぬのらにわたら月日を過しきて思へは惜き數ぞ積れる 政 賢
 曇りなれ玉を心おいしく社名もか、やかほをしめ也きれ
 無 常 こかちーやありとみるまもたのまを嵐れ峯に消る浮雲 道 英

古郷にいまと母の身まかり給へを聞いていぢを旅路よて 權

身お積る雪もいとほを消あへり心よそを旅のぢらかな 邦三郎
 たなしく靈位を拜して

今日よりお親れをーへの言の葉よ涙の露をかたて社とれ 八 尋
 釋 教 み佛に龍乃そ、たー水こぢは流れて深れさきまなりけめ

世の中に流る、法の水のみはわーの高ねの花のーたけゆ 義 成
 月前 懐舊 けさよける昔れもへたあかそくる月の影よもちる涙かな 幽 叟

寄松	寄書	寄懷	神祇	伊勢	寄鏡	寄花	社頭	社頭	社頭	社頭	紀元	天長
舊	舊	舊	祇	勢	祇	祇	水	松	松	松	節	節
我やどの松もいつしかの杖れともよ久しき老や語らん	今を世もなきされ浦のも鹽草かき置跡をたれとそみる	ぬはちをふ神れ光のはを鏡くもりなきよをあふけもろ人	度會や高かやふけるみあらうた色あるよりも貴かりけり	みつ垣れ久しき世より神葉にうけて曇らぬ神れみか、み	やひら手にこぼる、花れ下露は神の恵の、るなるらん	曇りな心をうけす鏡ともいよ、澄みたらまれみつ	もみちは、散埋みても世の塵に更も濁らぬみたら、の水	御祭の庭ふすゝ、く琴の音に調へはするもりのまつ風	やは萬かかねて祝ふ我國またさかえゆく神のみやしろ	かし原れ宮の昔をはしめにてかはらぬみよを祝ふけふ哉	年ふとよ祝ひまつれる日は御旗榮行み代の影もとえつ、	
敬忠	直雅	勇雄	元一	良致	實俊	春萬侶	穉竹	清長	吉成	吉胤	群松	

楠公五百五十年の祭祀よ湊川神社獻詠 懷古

流れての世にかをりけり湊川菊乃しゆくを水々みよして 國足
とや一ゆ地昔れもへはま心のたまよりはなつ光なり香り 敏
あゑ波よくつれし岸をとなと川流れて清きせと也にけり 隼雄
湊川よこるぞれ世のしのこれて涙は袖をぬら、つるかあ 良秋
別格官幣社菊池神社よ祀れたまへる藤原武時朝臣お從三位れ
御贈位祭式仕奉りて

かくそしき菊の一もと萬代にぬくも高きさくの一もと 豊水
信濃國諏訪神社へ詣ける日筒粥の神事を拜して

たあつ物八束足穂にまけりゆく神の恵をほふくけふかな 宣安
靖國神社よ詣て

千萬の世にもきえめや君々たは千々にくだれし玉れ光え 群松

大成殿の聖像を拜しけふ時

むかへ君道の教をときと木の今なほ清きかせのおとかな
權少教正拜命の時 神祇官勤仕の事と思出て
淑 蔭

こはいかよ何によるへの水ならんふた、ひ清き流をそ汲

武藏國大宮公園ある故埼玉縣令白根君の碑を見侍りて

祝 埼玉君のいぢりち民草をめぐみの露のふかきなりあり
群 松
をさまれる世も大君の恵にてなほけりゆく四方の民草
吉 成

皇國はけに住吉の浦ちどりうら安死世をやさよとそなく

寄天祝 星は數月の高さも學ひてを空よしらるゝきみかみ代りあり
武 虎
貴 光

寄雨祝 小山田の畔こそまてに降雨の餘るはみ代のさかえをふ覽
扶 祝

寄國祝 四方の海の浪もしつけくうら安乃名よ榮之行國を樂しき
利 平

寄道祝 神なうら貴かりけり天地と共よきかゆくしきまのこち

寄松祝 常とはにめてぬき君か齡かな松も千とせの限りあふ世も
敬 喜

百とせふひと度匂ふ山まつの花といくたひ君やゑるらん
喜 侶

寄松竹祝 霜雪ハふれとくせと中々に松と竹どのいろろつねなふ
小瀧 健

寄竹祝 吳竹の枝葉の數のあらましを君さか行よそひともりあり
茂 重

寄鶴祝 君か代はさつの千年を幾返りよせてかそへんわかの浦波
永 清

山家祝 年々にこがひよろまど山里れお死なも結を身おまどひ鳥
親 知

寄鏡祝 照しみよ眞澄れ鏡とよまへお曇らぬ御代のまるし也とて
吉 成

六十賀 むぢち行君か齡をつるりめの千世萬代といえふきふかな
利 勝

千萬の春あてて咲にはきくら六十は千世乃り得み也あり
直

立かへふ今年の春をえしめよて猶限りなきよをや重ねん
きよ 子

七十賀 な、ぢち地年地をぬ巻くり返え祝返よばひれ限りなき哉
利 勝

八十賀 やそち餘りやつれ齡を山口お安くやよえんちよ地長さう
利 勝

九十賀 ことより十年のほめて百年の坂もこゆへき齡とう思ふ 喜惣治
 人の年 萬代もさかえますらん竹取れ翁をきみかためしにはして 重徳
 賀の年 時つ風枝も静よ君か代のをさまるはふよぬぬそうれした 道英
 幸遇 大君のみいつ畏み民草もとさ、ぬみ代にけりあふかな 元子
 大平代

此集春の部に歳首の詠を載たるはあかぬわさなれとろはた、
 ついてにまかせたるなりさきよ乞集先たふ言れ葉に新英とう
 は書えみりからの峰腰を憚るつるを又とくくこる、人々も
 あるによりみあひはいさ、かくはへつれとあせあゆるわさに
 なむ

輯者しるす

正霞朽
 誤霞朽

東京	小川町	佐々木弘綱	小石川	土岐徳恵子
	小石川	鈴木弘恭	番町	高盤延子
	深川	土屋峯子	島之内	名和大年
	島之内	伴光長	長堀	山中義信
	南本町	角倉邦高	全	吉崎吉次
	久太郎町	田原秋年	攝津	服部嶺雲
	高槻	堀貴光	全	藪重貞
	大原野	岡田惟平	地實	藤本日彰
伊賀	玉瀧	磯矢宗誠	全	奥村観道
伊勢	神森	高田顯允	宿野	羽田永清
	菰野	土方興文	福村	稻垣重一
	小木	御巫清直	櫻村	林字廣
	宇治	太郎館季賢	山田	井阪徳辰
	山田	小林真中	尾張	如醉軒蘿窓
	名古屋	相原弘道	常滑	關大倉
	熱田	林美香	生濱	久野一絲

七 七 九

片川永安笠行松久大前川寺全下赤小
 柳越井養原田山米附久保角山留澤路
 內冰荻常酒黑坂內嶋柴小中山野崎道廣幸
 山村原見卷澤谷山田藤室野政司道廣幸
 喜宗直芳真臣勝信三安友贊方英孝勤
 侶精義良風臣勝信三安友贊方英孝勤

七 二 七

赤下本下全野胃吉皆大下寺全唐全
 尾伊草庄玉村山見野谷木坂山竹
 安菅石小山中木根關飯石村田荻山岡小
 野間田山真清御武喜野井本邑譽浦豐部道政
 富次景美信綱香睦明治邦濟雄就清治

武相伊 駿
 藏摸豆 河

落圖貝連神府藤梅須柳全全大乙全生
 川師取光奈中澤木山島 宮川 濱
 朝河伊富內猿堀鈴渡秋高岩淺天平名
 倉合野澤田渡內木邊山瀨瀾井楚野留
 介清茂政俊容悠八隼敬真重清高陽周敏
 福輔音恕藏盛久東雄忠風武長陽周敏

遠江

橫山關全連全全安蒲山古全全福全全
 手崎戶 光寺 久原尻澤 田 全 全
 高坂小富小金猿川杉鹽土菅木注大平名
 野倉林澤金渡渡上山阪陔屋澤下連竹野留
 常倉林澤金渡渡上山阪陔屋澤下連竹野留
 孝子之賢壽愛子安重久貞郎密谷祝子

内山作修君

井上喜文輯

類題新英集

翰香堂梓